小説盆栽物語

空海が唐国から遣唐船で持ち帰った盆栽…お笑い歴史小説

音川伊奈利

小説盆栽物語　１話　空海唐から盆栽５０鉢持ち帰りへ

804年5月12日難波津(港)から4隻の遣唐船が遥かかなたの中国唐の都へ出航していた。4隻の大船団は全長30メーターほどで唐風の朱と白の塗料で派手に化粧されていた。一行は遣唐使大使を先頭に学者、医師、薬学、土木技士、僧侶などと航海司ら乗組員で総勢400名にもなっていた。この400名を専門分野ごと4隻に100名ずつ分散させている理由は嵐などで転覆難破しても専門職が全滅しないための予防の処置だった。

比叡山延暦寺の官主最澄は第一船に乗船、最澄の弟子の空海は第二船に乗船して同年8月10日船団4隻とも無事明州の港に到着していた。明州から唐の首都長安までは陸路1500キロ1日10里歩いても約40日ぼどかかるが、ここで中国仏教の修行はもちろんだが、主な目的は中国仏教の教えを記した多数の経典や書物、それに曼陀羅、仏像を日本に持ち帰ることになる。当初朝廷に差し出した遣唐使予定表には最澄、空海とも留学20年とあるが、空海は明州上陸直後に明州の僧と面会している。

僧は明州の港に近い小さな寺で小品寺の住職の宗景というが、その宗景に、
「2年後の806年第19回遣唐使の船がこの港に着くが、私と最澄はこの遣唐船で日本に帰る予定をしている。その船で持ち帰る物を調達してほしい」
といって空海は宗景に銀2枚を手渡している。宗景はこの銀を手にして、
「空海さま、まさか…阿片とか大麻では…」
「いやいや、白檀や黒壇、それに紫檀、タガヤサン、イブキ、黒松など珍しい唐木の苗を鉢植えにして20鉢ぼど用意してほしい。できたらそれらの育て方を書いてほしい」

この銀2枚といえば小さな家と家具のすべてがそろうほどの大金で宗景が阿片などの禁輸品と間違えたのはやむを得ないが、宗景はもう一つ勘違いをしていた。それは白檀や黒檀の苗木というが、白檀などは白檀の木の下に行けば小さな苗から5年目の若木まで無数に自然に育っている。他の唐木も同じでそんなものを引っこ抜いて鉢に植えた物に空海も銀2枚も出すとは到底信じられない。少しは中国語を話せる空海も宗景も手振り身振りの会話だが、それらを確認して約束していた。

宗景は寺の植木を手入れしている造園業の林心に相談をしていた。空海から預かった銀二枚の話しはしなかったが、林心に、
「日本から来た空海という偉い坊さんから日本に持ち帰るためのかなり高価な唐木の苗を鉢に植えたものを20鉢用意してほしいと頼まれたが、林心さんはこの意味は分かるか?」
「そ、それは長安の貴族の間で流行っている盆景(盆栽)になるが、この明州には一つもない」

「それなら林心さん、植木屋だから20鉢ほど作ってほしい…銀一枚でいかがか?」
「いやいや、この盆景は最低でも10年、長安にある盆景は樹齢350年というのもあり、貴族の間では銀十枚で取り引きされている」
「それなら～銀一枚では一鉢も買えない」
「いや、それは特別なもので銀一枚もあれば20鉢位は買える」

宗景は空海が修業するという長安の西明寺の末寺で小品寺の住職をしていた。本山では宗務議員を務めるほどの実力僧侶で明州の長官とも親しく西明寺に2年間修業に行くとの名目で長官から許可をもらっていた。長官から正式に許可があれば長安への往復の旅費は公費として明州から出るというほど政教癒着をしていた。

宗景の目的は空海から預かった銀二枚で盆景を20鉢仕入れるという約束を守るためだが、宗景自身が樹齢350年で銀十枚もする盆景に興味を持っていたからだ。そして宗景も空海に渡す盆景20鉢の他にも自分用として20鉢を自寺に持ち帰えろうと思っていた。なにせこの金は空海からで旅費は公費で出るから坊主丸儲けの計画になる

9月4日宗景は長安への長い旅に出発したが、広大な中国からすれば1500キロ(京都～旭川)ぐらいの旅は短距離の部類になる。この宗景も長安の西明寺で修行して明州の小品寺に赴任してからも本山の西明寺に3年に一度はこの道を往復して今回で5回目になる。

また明州から長安への道は絹街道(シルクロード)と呼ばれ唐の首都長安100万都市への食料などを供給する一級国道になっていた。これらの大量の物資は明州から東へ２つ目の地方都市の杭州から長安に近い洛陽までの運河で運ばれるが、旅人はただひたすら歩くしかなかった。長安までは杭州、蘇州、洛陽など七つの地方都市(人口20～50万)があるが、この地方都市の間はさらに小さな町がありそこには宿場もあった。

この1500キロの道を1時間に4キロ寝ないで歩いても約16日はかかるが、足の早い旅人なら30日ほどになる。宗景の宿泊はどんな小さな町にもある寺でどの寺も旅の僧侶が宿泊できる宿坊がある。宿泊費も格安で宗景は毎晩酒を飲むという気楽な旅行者になっていたために長安に着いたのが40日目の10月14日だった。

宗景は本山である西明寺の宿坊に入るが、その宿坊なは最澄や空海など日本の僧侶10名も長安での宿泊先としていた。宗景はその日に空海と面談して盆景の話しをしていたが、空海は宗景に調達してほしいとしていたのは紫檀や白檀の苗木そのもので盆景ではないことがわかったが、空海は宗景が熱く説明する盆景に興味を持っていた。そこで毎月15日青龍寺の境内で開催される「盆景市」を観に行くことになった。

　この盆景市は長安とその近郊の造園業が盆景を持ち寄りその数は数千鉢にもなっていた。高いのは樹齢300～500年ものでは銀10枚もしていたが、中には庶民でも気楽に買える小品盆景もあった。そして盆景趣味の会の仲間が小品盆景を持ち寄り入札で競っている場所も境内に数か所あり盆景愛好家が多いのがわかる。

　空海もこの盆景には感動して宗景にさらに銀二枚を手渡してこの盆景を後30鉢追加して50鉢を平安京に持ち帰ると言い出していた。宗景はさらに二枚の銀に目を点にして驚いていたが、この空海の金使いが荒いのには理由があった。最澄と空海は朝廷に唐の国への留学は20年と申請してそれが認められていた、つまり、20年分の留学費用と日本に持ち帰る経典や曼陀羅、それに仏像や美術品を購入する費用などで銀200枚を桓武天皇から預かっていたが、これは二人の大嘘で最澄も空海も2年後の第19次遣唐船で帰ることを決めていたので留学資金は有り余っていた。

★～(この大嘘は日本に帰国してから朝廷で問題になり比叡山を常に擁護していた桓武天皇は亡くなり、奈良仏教派の平城天皇が即位されて、比叡山の従六位最澄、従七位空海の位階(官位)を5年間剥奪する懲戒処分を受けた。この後、菅原道真が遣唐使は金があまりにもかかるために中止させたが、この空海の大嘘が原因だった)

★～1話のあとがき
この小説を書こうと思ったきっかけはある居酒屋でたまたま日本盆栽大観展の関係者から盆栽展の招待券をもらったことになる。それを鑑賞して感動してこの時の画像をツイートするとたちまち700ほどのアクセスがあった。これだけ盆栽ファンが多いのにも感動してそうだ「小説盆栽物語」を書こうと思ってやっと1話が書けました。図像はツイートしたもの。

小説盆栽物語　2話　宗景造園業に弟子入りで盆景和尚となる

　空海と宗景は青龍寺境内の盆景市を見て歩くが、空海は中国独特の山河の風景を模した大振りの盆景に足を止めては造園業者に熱心に身振り手振りの中国語で説明を求めていた。空海のこの時の衣装は赴任2日目で朝から青龍寺の大僧正に挨拶するための正装で見るも鮮やかな緋色の法衣だった。この緋色の法衣は唐でも最高位が身に着ける法衣でもあり、この有難い姿を一目見て拝みたいたいという市民に囲まれて空海は唐の人達が仏教や僧侶を心から信頼していると日本との違いを感じていた。

　一方の宗景は空海とは違った小振りの盆庭風で樹齢10年ほどの春に花が咲く梅や山桜の盆景に足を止めでいた。盆景にも樹木の違いの他にも盆山、盆庭、盆石などがあるというのが盆景の素人の宗景にもなんとなくわかってきたが、数千鉢はあろうかと思う各盆景には価格はどこにも書いていなかった。たとえば銭50文と記してあれば40文にまけてと言えるが、また他の店との比較もできる。

　宗景は試しに気に入った柑橘系の葉っぱで中ぐらいの大きさの盆景を指さして造園業の親方らしき者に、
「これはいくらですか？」
「お坊さん、さすがお目が高い、これは樹齢20年物の果林です。そろそろ花が咲いて秋には30ぐらいの実が成ります」
「ほう、それは素晴らしい～それでおいくらですか?」
「お坊さんのことですから銭一貫(1000文)に大まけします」
「そか、それは安いが、生憎法事の帰りでそのような大金はもちあわせてはいない」

　とは言っても宗景にはそれが本当に大まけされたのか、ボッタクリされたのかは判断する知識がなかった。さらに数軒の出店で気に入った盆景をみつけては値段を聞くが、どれもが銭1000文前後で業者が示し合わせているのかと疑っていた。こうして宗景が冷やかしともとれる行動にでたのは空海から預かった銀4枚で平安京に持ち帰る盆景を50鉢を買うが、それをそのまま全額使えば宗景には銭の1枚も残らない。たとえば銀2枚で済めば宗景には銭2枚もの大金が報酬となる計算になる。そのためには造園業者に負けないほどの盆景への目利きと栽培技術を学ばなければならないと本気で決意を固めていた。

　さらに宗景が感心したのはこの青龍寺境内の盆景市に訪れる市民のすべてが青龍寺にまずはお参りしてから市を観るというが、そうなればお賽銭やお布施が寺に入る仕組みだった。人が集ま

れば盆景ばかりか古着や乾物の店が出るという仕組みになるが、これらは宗景だけでなく同行している空海も同じことを考えていた。

　その夜、宗景は空海の部屋で僧侶専門の健康飲料の般若湯を飲んでいた。これは湯という漢字の通り米など穀物が原料で酒と同じ醸造方式の中国式スープになるが厳しい戒律上酒とは絶対に呼ばないが酒と同じ酔い方をする。空海は、
「長安の人口は100万になるが、平安京は15万しかいない。それに唐の都から一番近い港からここまで1500キロもあるので外国の軍隊も都には攻められない」
「日本の都って15万しかいないのですか?。私の寺がある明州は地方都市だが20万になります」
「それだけではない、京の都まで日本海であれ太平洋であれ外国の敵が上陸すれば都まで40キロほどで一日でその日の内に都は陥落する」
「そんな弱い国ですか～日本は？」
「そうだ、だから唐の国に日本中から集めた宝物など貢物を持って唐の皇帝にご機嫌をとっている外交をしている」

　空海と宗景は気が合うのかウマが合うのか、連日連夜空海の部屋で般若湯を飲んでいた。そんな折、空海は宗景に日本に来ないかと誘っていた。空海が言うには、
「平安京に建立中の国営寺院の東寺の官主に内定しているが、その東寺を青龍寺のような市が立つ寺にしたいが、その役目をしてほしい」
「市…盆景市ですか…でも私は盆景のことは…」
「だから、私が日本に帰る日まで1年半もあるが、盆景の修業をしてほしい。それに東寺南大門の目の前にある九常寺の住職をしてもらう」

　この話しが二人の間に成立して青龍寺御用達の造園業の親方雅山に宗景は弟子入りしていた。宗景は西明寺の朝のお勤めをしてから毎日造園業に通う宗景のことを市民らはいつのまにか「盆景和尚」と呼んでいた。月のほとんどは盆景作りだが、毎月15日の盆景市では盆景を売る掛け引きなど商売まで修業していた。

　僧侶の修業といえば山に籠もり荒行をするというのが日本流になるが、この当時の唐の国では「民衆を救う」というのが仏教の根本になっている。大都市では稲の品種改良から病気の予防、農業用水路の土木工事、街道の整備、医学、医薬、気象学までの学者や専門家は数多くいるが、広大な国土と5000万人を超える人口では地方まではそれらの技術や学問が届かない。飢餓になって国民が苦しみ餓死者が出ても寺や僧侶はただ仏像を拝むだけの中国仏教ではなかった。

　その僧侶の修業とは都会に出てそれらの学問や技術を勉強、習得して地方に持ち帰ることになる。宗景が長安で造園業の技術を習得して明州に持ち帰るということは、やがて明州で盆景が栽培されて人材も育つという中国仏教の仕組みとなっていた。つまり、本来は政府や行政がしな

ければならないことを僧侶に託しているからこそ修業目的が明州の長官に認められれば旅費や滞在費が公費から出ることになる。

　この宗景も長安の長官に盆景の修業1年半の修業が認められて費用の全額をもらっていたが、これより先に明州からも2年間の修業費用をもらっていた、さらに空海からも金をもらっていたので宗景は二重、三重の悪くいえば悪知恵、良くいえば熱心な修業僧だった。

小説盆栽物語　３話　盆景(盆栽)のルーツ、雅山少年が発見

造園業雅山園の前庭には約1000鉢の盆景が盆棚に並んでいる。店は街道に面して誰でも買えるが、店番は親方の娘の玉林(ユーリン)に任されていて値段の交渉も玉林がやっていた。雅山園には植木職人が50名ほどいるが、職人は宮殿、貴族の屋敷や寺の造園とそれらの植木の手入れをしていた。もちろんそれらの庭にある樹齢300年以上の高価な盆景も手入れしている。

雅山園に並べられている盆景の剪定などの手入れなどは親方と玉林がしているが、半分ほったらかし状態になっていた。月一回の青龍寺の盆景市に出品する約100鉢の盆景は事前に選ばれて玉林が手入れしていた。ただこの盆景というのは完成品を買うというより、買った人が剪定などの手入れがしたいという欲望を満たすためにわざと八割程度の未完成の盆景を店に並べていると親方は新弟子の宗景に説明をしていた。

師匠の雅山は八代目で初代の雅山は長安より西に歩いて1時間ほどの桂林の貧困農家の三男として生まれた。この地の山は水墨画のような険しい山でその山から流された石灰石のカルスト台地で農業には適していなかった。多くの農民らは山の麓で自然に育っている松や梅など庭木に適した木々を探して長安の造園業者に持ち込み買ってもらっていた。

それらも乱獲で山の麓には金になりそうな木々はなくなり農民らは危険な山に登るようになっていた。15歳になっていた雅山も山に登って松や珍しい草花を見つけるが、それは松なら幹は太いが背丈はなく到底庭木には使えなかった。これは剣のような険しい山には草木が育つ土はなかったが、わずかな窪んだ所に風で砂や土が運ばれてきた。そこに種が飛んで来て着地して芽を出し育っていた。

せっかく芽を出して根を張ろうと思っても植物にすれば山は硬い岩盤で根は岩盤にしがみつき横に張るしか手はなかった。その分背丈は伸びず年数が経つにすれ幹だけが太くなり枝も強風にさらされて育たなかったが、このまま10年、20年と厳しい環境で生き延びてきた。

雅山少年はこの山の植物を地上の柔らかい土で育てたら根は直下に張り庭木にできる木に育つかもと約20種類の草木を家に持って帰っていた。草花については次の春には背丈も伸びて元々珍しい高山植物ばかりで長安の貴族に飛ぶように売れた。これを機会に雅山の父親も花を育てる農家として息子の名前から「雅山園」として自前の農地で花を育てていた。

雅山少年は山で採取した松を3年も育てていたが、元々の太い幹からはか細い幹が真っ直ぐ上には延びるがその姿は得体の知れない不細工な姿の松でしかなかった。雅山はその不細工な松を畑

で寝ころんで何気なしに見ていたが、頭の中になんとなく遠い故郷の風景が浮かんできたが、雅山の故郷はこの地でこの畑だがと不思議に思っていた。

　そこで雅山はそこらの石を松の根に並べて見たが、そこには水墨画の中の古い田舎の風景があった。雅山はこの瞬間に「これだ!」と飛び上がっていた。この日から雅山はまた険しい山に登ってなるべく幹が太くて樹齢がある松や梅、楓などを採取して木製の浅い盆に根が下に張らないように丁寧に育てていた。そしてこれらの名前は盆の上の景色、つまり盆景と呼ばれるようになっていた。雅山少年が山の松を育ててから280年にもなるが、その当時の盆景の松は長安の宮殿や貴族屋敷、由緒ある寺院に樹齢300年の盆景として残っているが、その手入れは今も八代目の雅山園がしていた。

　このような雅山園の歴史を玉林から聞きながら宗景は玉林の指示で盆景の修行を始めた。玉林も宗景がここで盆景のすべてを習って空海と共に日本に持ち帰り青龍寺のような盆景市を主催すると知っていた。しかし、長安から港のある明州まで盆景を運ぶには人夫を雇っても40日はかかるのでその日を差し引けば残り1年しか残っていないことになるので玉林は宗景に連日厳しく教えこんでいた。

　玉林は24歳、色白で背が高い美人で青龍寺の盆景市では盆景小町と呼ばれるほどの人気だった。それに雅山園は宮殿御用達で八代目雅山は全中国造園組合の組合長、さらに青龍寺檀家総代で民間では唯一皇帝に御目通りが許されている長安一の名匠だった。その娘に目をつけるのは市民ばかりか貴族も月一回の盆景市に通うほどだった。その玉林は3歳ごろから盆景の剪定鋏などが遊び道具で15歳から中国盆栽大観覧展で皇帝賞を5連覇していた。その後はこの展覧会の審査員をしていた。

　宗景は得意な水墨画を玉林に教えながら雅山園に古くからある樹齢100年以上の盆景の技すべてを絵で日本に持って行くために水墨画で描き写していた。水墨画は黒い墨で描くが、濃淡、ぼかしなどで5色の彩色ができるという。宗景の描く盆景の松は写実的だが、背景の桂林の山や川、石庭などは山水画の技法を取り入れていた。小さな盆景の松の下には川が流れてそこで漁師が小舟を漕いでいる小宇宙の水墨画に玉林は感動したのか我を忘れて宗景に抱きついていた。

　この玉林抱きつき事件があってから玉林が宗景に盆景を教える時間より、宗景が玉林に水墨山水画を教える時間の方が長くなっていたというより朝から夕方までなにをするにもどこにいくのも二人一緒だった。これらは雅山園の職人は元より親方の雅山も気がついていたが、むしろ若い二人を応援していた。

　唐の国では僧侶というのは民衆から最も尊敬される身分になっていた。しかも宗景は長安でも由緒ある西明寺の宗務議員で明州の小品寺の住職でもあるが、やがて長安の大きな寺の住職にな

るのは目に見えていた。いゃいゃ、それだけではなく雅山も宗景の人柄が大好きだった。さらにもし玉林が宗景と一緒になれば雅山の人脈を駆使して西明寺の大僧正(貫主)にまで出世させる自信と実力もあった。そうなれば玉林の生んだ男の子は雅山の孫になり、その孫はやがて西明寺の貫主になると雅山は雅山で大きな大きな夢を描いていた。

小説盆栽物語　４話　宗景、玉林の禁断の恋から若者たちが
盆景を爆買い

　八代目雅山は一人娘の玉林をなんとか宗景の妻にしたいと願っていたが、なにせ戒律が特に厳しい西明寺の僧侶ではかなり難しいと悩んでいた。ただ玉林に宗景の子供を産ませるだけなら容易いが、その子供が宗景の子だという公的証明がなければ雅山の野望はかなわないことになる。

　一時宗景が俗人となって玉林と結婚して男の子を授かってから後に再び僧侶に戻る手はあるが、しかし、それでは西明寺での地位は下がり小さな寺の住職にしか出世は望めないことになる。そこで雅山は宗景と同じ西明寺の宿坊にいる空海に面接を求めていた。

　空海はこれらの事情は宗景から聞いているのか話しは早かった。空海は雅山に般若湯を勧めながら空海は、
「たしかに女犯は戒律に触れるが、この女犯とは浮気とか不倫、強姦、売春を禁じたものになる。たとえば酒を飲むのも戒律には触れるが、この般若湯を飲むのは戒律には触れない。しかし、修行の場に女を入れたり般若湯を持ち込めば戒律に違反するがこの場は宿坊であって修行の場ではない」
「なるほど…禅問答のようですが、しかし、この長安で妻帯している僧侶はいませんが?」
「そう妻は認められないが、中国仏教でも日本仏教でも多くの末寺では世襲制になっている。その僧侶の子は誰が生むのか?、雅山殿」
「女犯は戒律がありますから、やはり妻になります」
「ただ妻と言っても女だから修行の場でもある寺には入れない、そこで日本の各宗派では寺の裏に奥の院という住職の宿坊に世話係という女性を置いている」
「なるほど…つ、つまり、その女性が事実上の妻になるのですね…それで酒を般若湯と同じ意味で妻を奥さんというのか…」
「その奥さんが妊めばこれは客観的に見ても住職の子になる。そしてその寺の檀家総代が認めれば公でも住職の立派な子になる」
「なるほど…実は私も青龍寺の檀家総代ですが、宗景さんは西明寺ですから…」
「なに、雅山さんは青龍寺の檀家総代ですか、それなら一つ頼みたいことがある」

　空海が雅山に頼みたいものとは空海は日本国官営の東寺の官主に内定していた。この官営とは日本国を代表する寺になるが、その寺に相応しい御本尊がどうしても必要になるのでそれを手に入れるために桓武天皇は最澄と空海を唐の国に派遣していた。そして空海が白羽の矢を射たのは青龍寺にある大曼荼羅になる。

　空海は雅山に、
「青龍寺には大曼荼羅が3体もあるが、その中の立体大曼荼羅を日本に持って帰りたいが、それは貸与でも譲渡でもいいが、なんとか雅山さんに口利きをしてほしい」
「大、大曼荼羅ですか?、あれは唐の国の国宝に指定されています。しかし、この中国では賄賂とコネがあれば不可能なことはなにもありません」
「そか、この中国は賄賂とコネでできているのか?、それならそれらの軍資金として銀100枚を雅山さんに託しますからこれで大曼荼羅を日本に持ち帰る手配をお願いします」

　雅山は造園業としての財産はそれなりにあったが、銀100枚とは途方にもない大金と驚いていた。雅山がいうコネについてはまず、民間では唯一皇帝に御目通りがかなう身分と長安の行政長官の臥龍とは阿吽の呼吸の間柄、そして青龍寺の檀家総代として青龍寺の貫主とはこれまた賄賂コネ仲間でもあった。そこで空海にこの件は引き受けるが、玉林と宗景の件はどうなるのかとこの件とあの件とを取り引きに使う姿はやはり中国人は賄賂とコネでできていると空海は思っていた。空海は、
「その件は天台宗官主の最澄大僧正さまから知恵をいただきますから少し時間がほしい」

　805年12月15日青龍寺境内では今年最後の盆景市が開催されていた。玉林と宗景は仲良く雅山園の店で働いていたが、この二人を見ようと朝6時の寺の開門と同時に若い女性や男性が押しかけていた。長安という街は100万都市で面積も広大だがこういう美形の若い僧侶とこれまた美人の若い玉林との禁断の恋の噂はあっという間に超特急の速さで広がっていた。

　さらにこの二人が愛しあったのは盆景が縁だということになり盆景など老人の暇つぶしの悪趣味だと見向きもしなかった若者たちが盆景市に押し寄せていた。若者たちの間では女性は花が咲く桃や梅、それに山桜の小品盆景を育てていると良縁が舞い込んで来ると信じられていた。男性は実のなる果林や柿、林檎、それに夏芽に梨の小品盆景を育てると金が成る、そして良縁が実ると信じられていた。

　この玉林と宗景の禁断の恋から発生した小品盆景の大流行は中国全土に広がり中国第二の都市洛陽(人口50万人)からも若者たちが330キロも離れた長安まで10日も歩いて買いに来るという社会現象になり、それが皇帝の耳にも入っていた。皇帝にすれば民衆の支持がなければあらゆる政策の遂行はままならない現実を知っているからこの「禁断の恋」を破綻させれば若者たちの支持を失うのは目に見えていた。さりとて政府が宗教の戒律まで口を出すのは政教分離の大原則を破ることになると悩んでいた。そこで玉林の父親の雅山を宮殿に呼んで事情を聞くことになった。

小説盆栽物語　５話　玉林、宗景皇帝に祝福され結婚…豆盆栽

　雅山は宮殿に呼ばれたが、この宮殿の広大な敷地にある池や大小20にもなる庭園のすべてを雅山園がもう150年も前から管理していたので宮殿に呼ばれてもそんなに違和感はなかったが、今日呼ばれたのは造園関係などではないことを察知していた。雅山は皇帝の前でかしこまっていると、皇帝が、
「そなたの娘の玉林が西明寺の僧侶と禁断の恋をしているが、仏教の戒律からして認めることは出来ない」
「皇帝さま、誠に申し訳ございません。私の監督不行届でご迷惑をおかけしています」
「そか、だからといって私が若い二人の仲を引き裂いては無粋な皇帝と国民に笑われるが、雅山なんかいい知恵はないのか?」

　そこで雅山は空海から聞いた日本仏教の世襲制から奥の院の話しをしていたが、皇帝は、
「そか、酒を般若湯、妻を奥さんとはなかなか日本の仏教は頭が柔らかい、だが、宗景は戒律が最も厳しい西明寺の僧侶になるが…」
「そこで比叡山延暦寺の官主の最澄さまに知恵をいただきました。それは延暦寺の唐別院を長安に建立してそこの住職を最澄さまが宗景に任命するということです。つまり、小品寺の住職と兼務していただきます」
「しかし、それを西明寺が認めるのか?」
「はい、それはもう貫主の行人さまにご了承をいただいています」
「ほう…雅山、行人貫主には銀を何枚渡した?」
「いえ…それは…あの～銀10枚です」
「そか、それなら延暦寺の唐別院及び奥の院の建立の許可をする」

　こうして雅山は長安中の住職がいない寺を探して買い取りその寺を改修して、また増築で奥の院を建てていた。御本尊は最澄が西明寺の宿坊で手掘りした薬師如来立像(後の中国の国宝)を安置して最澄、空海のお勤めで落慶法要及び御本尊の開眼法要の日を迎えていた。とはいってもこれは玉林と宗景の事実上の結婚式で新居は奥の院になる、これらへの皇帝の粋なはからいが国民には大人気になっていた。

　この寺院の正式名称は比叡山延暦寺唐別院だが、長安の人々からは通称「盆景寺」で住職の宗景は通称「盆景和尚」と親しく呼ばれていた。盆景寺の場所は長安の市街地から東の端で第二の都市洛陽に通じる街道の入り口にあった。寺の前庭には玉林が育てた小品盆景が500鉢ほどが玉林が育った雅山園から運ばれていた。これらは売るための商品でもあるが、小品盆景を年中展示する展示場にもなっている。もちろん寺であるから信心深い長安の市民はまず本堂にお参りするた

めのお布施やお賽銭を持参していた。

　この玉林と盆景和尚との禁断の恋から発生した盆景の大流行は玉林と盆景和尚の皇帝や日本の大僧正まで巻き込んだ歴史的な結婚で盆景の大流行にさらなる火が付いていた。しかし、小品盆景とはいえ商品になるまで育てるには最低でも10年はかかるので生産の目途が立たなかった。そこで盆景和尚はこの盆景の大流行で長安(人口100万人)だけでも少なく見積もっても300万鉢は出回っていると推測していた。これらを前提に盆景の下取り販売を玉林に提案していた。これは一鉢銭60～70文(米が15キロ60～70文する時代)する盆景だが、各種盆景に応じて10～30文の下取り価格を設定して新たに買った盆景との差額を支払うという中国では始めての下取り制度になる。これら下取りされた盆景は剪定したり植え替えたりして商品価値を高めて再び売ることになるが、この下取り制度がある限り盆景寺の盆景の数は売れても売れても永久に減ることはなく常に盆景寺には500鉢の小品盆景が展示されることになる。

　と、こんな提案を盆景和尚から熱心に聞いていた、玉林は、
「そうよね～元々盆景は祖父から子、子から孫、ひ孫に受け継がれ、また人の手から人へと大切に育ててもらって何百年も生きて来たのだから盆景の持ち主が替わるのは自然なのよね～私は宗景さんの提案に賛成します」
「そうか～ありがとう、ただ、下取りした盆景への剪定や手間は大変になるが…」
「そうね～でも近所の主婦に手伝ってもらえば皆さんもそれなりの収入にもなるし…」
「すまんな～玉林…」
「宗景さん、私も一つ提案があるの…」
「なに？、玉林のことなら何でも聞くよ!」
「このお寺でもそうだけど…松や楓、南天、ナツメの木の下には種や新芽が足のふみ場もないほどあるよね～私、それを手の中に隠れるほどの小さな器に土を入れて楓の新芽を植えてみたの…そ、そしたらこれが可愛いいのよ～とてもとても盆景などとは言えないけど可愛いくて育てているの」
「ふむ、豆盆景か～玉林、これはおもしろい」
「あらら、豆盆景というの～可愛い名前!」
「そそ、その豆盆景の豆盆景鉢を作り子供たちに無料で配って種や新芽を育ててもらって盆景や園芸の魅力を知ってもらえば裾野が広がりやがて土色の中国から緑豊かな中国になる」

　こうして玉林と宗景は雅山園の盆景鉢を150年前から作っている窯元の親方に豆盆景鉢を作ってほしいと頭を下げていたが、その親方は玉林と盆景和尚の結婚のお祝いに無料で1000個も作ってくれるという。豆盆景鉢を子供に無料で配ると子供らは我先にと花の種や木の種を拾い、新芽を見つけると優しく植えている姿を二人で夢見ていた。

小説盆栽物語　６話　日本茶のルーツは武夷岩茶の盆景になる

　最澄、空海と盆景和尚らが第19次遣唐船の日本への帰りの船に乗るために長安を出発する日は806年10月5日と決定していた。それまで残り半年と迫っていたが、まだ玉林のお腹にはご懐妊の兆しはなかった。盆景寺の盆景展示場には花が咲き、新緑が芽生えて色鮮やかになり寺の参拝者や盆景の観覧者、それに盆景を買ったり下取りなどで連日賑わっていた。このころから玉林に早く赤ちゃんが授かるようにと御本尊の「薬師如来」にお願いする若い男女が増えたことから子宝を授かる寺としても有名になっていた。

　玉林の父親で造園業八代目の雅山はこの寺の庭を唐国一の枯山水の石庭を造園するのだと職人10名を引き連れて造園作業を連日していたが、これとは別に空海から依頼された大きな仕事があった。それは日本国国営の東寺に相応しい御本尊の大立体曼荼羅を青龍寺から日本へ持ち込むという大それた計画だった。

　雅山は青龍寺貫主恵果とは貫主と檀家総代という関係だが、それ以上で賄賂、コネの共謀はもちろん、酒も女遊びも共にやってきた親友だった。それ故話しは単刀直入で交渉をしていた。雅山は恵果に、
「玉林と宗景の結婚に関して私は空海に大きな借りができてしまった…それを返さなければならない…」
「ほう、その借りとはなんだ?」
「それが…この寺の大曼荼羅を一時日本国に貸してほしい…」
「ほう～なるほど…それでお主は空海から銀を何枚もらった?」
「そ、それは…100枚だが、西明寺の行人貫主に10枚、長安の長官に10枚、それに盆景寺の建立に20枚を使った」
「そか、なら60枚も残っているのか？」
「そうです、その銀60枚をお主に託すが？」
「そか、しかし、あの曼荼羅は国宝に指定されているが皇帝の許可は?」
「まだだ、それをお主に丸投げしたいが?」
「ふむ…それで比叡山は日本国を代表する宗派なのか?」
「いえ、今は奈良仏教ですが、最澄と空海が日本に帰れば比叡山が国を代表する宗派になります」
「そか、しかし、それを証明するために誰かが大曼荼羅と一緒に日本に行かねばならないが?」
「はい、宗景を大曼荼羅搬入の立会人として4年間派遣いたします」
「そか、しかし、宗景は西明寺の僧で大曼荼羅は青龍寺のものだが？」
「いえいえ、大曼荼羅も宗景も唐国の特使ですから宗派は問いません」

「ほう、宗景が唐国の特使なら無事日本から帰国して来るとどうなる…雅山?」
「はい、それはもう大僧正(西明寺貫主)になります」
「そか、お主の目論見はこれか?雅山？」
「はい、恐れ入ります」
　こうして雅山と恵果との悪巧とは知りつつも皇帝は国宝の大曼荼羅を日本に100年間貸与するという許可と宗景の唐国特使僧を認めた。しかし、それは第20次遣唐使でこれらに見合う日本の宝物を遣唐船4船団に満載して来るという条件付きでもあった。雅山は唐国とは賄賂とコネの国だと言っていたが、さすが唐国の皇帝だけあって雅山や恵果より悪知恵が一枚も二枚も役者が上だと二人は関心していた。

　玉林と盆景和尚は日本に持ち込む盆景を吟味していた。当初は空海から銀4枚で50鉢の盆景を予定していたが、雅山はその金を受け取らず100鉢を無償でくれるという。さらにその100鉢の他に国宝級の岩茶の盆景を持っていけというが、その岩茶の盆景は盆景和尚も知っている青龍寺の宝物で樹齢300年の武夷岩茶というものだった。

　盆景和尚はこれには驚いて、義理の父親でもある雅山に、
「こ、これは青龍寺の寺宝の岩茶の盆景ですか…」
「そうだが、初代雅山が15歳のころ桂林の険しい山で偶然見つけた松が盆景の始まりになるが、もう桂林の山には目ぼしい盆景がなくなり、それで18歳のころ長安から東へ75キロの福建省のこれもまた険しい武夷山にへばりついていた茶の木の盆景を4本見つけてきたが、その中の1本がこれになる。武夷岩茶とは初代雅山が命名した」
「そうですか～この岩茶は私たちが日ごろ何気なしに飲んでいるお茶のすべてがこのお茶の木から接ぎ木されたものだと聞いています」
「その通りで烏龍茶についてはこの岩茶がもし見つからなかったらこの世には存在していないことになる」
「その、岩茶をどうして…」
「いやいや、これは初代雅山が280年前に青龍寺に貸与したものだから、貫主の恵果に返してほしいと申し込んだだけだ!、それにこの岩茶を280年も無償で手入れしてきたのも雅山園になる」
「しかし、この岩茶の盆景をどうして日本に?」
「いやいや、これまで日本の第一次遣唐使から第１５次遣唐使まで日本に持って帰るお茶の木や苗木、それに種の注文を受けて売ったが、そのどれもが育たず第１6次から日本はお茶の栽培を諦めたそうだ」

　岩茶の盆景には白い花が50ほど付いている、雅山は、
「この盆景の種をもう何回も採取して育てているが、長安の土には合わず、福建省の山の土のみ育つことがわかった。宗景さん、玉林と一緒に福建省の茶園の土と育て方を勉強してほしい」
　これは雅山の作戦でこの二人になかなか子供が授からなかったが、この二人の新婚旅行気分な

らと雅山が考えた作戦だった。福建省までは歩いて3日はどかかるが、修行の身だった宗景の泊まる宿は寺の宿坊しかなかったが、今回の旅は新婚旅行ということで旅籠はすべてその地方の一流の料理旅館に泊まれと雅山はこの二人に命令をしていた。

　玉林と宗景は3日後に福建省の武夷山の湖畔にある料理旅館に宿を取っていた。部屋からは茶園が見渡す限り続く風景を宗景は水墨画で描いていた。そして玉林を座らして武夷山を背景にしてできた絵を見ては二人は笑い転げていた。明くる日には武夷山の麓にある武夷岩茶記念農園を訪ねていた、そこには初代雅山が武夷山で見つけた岩茶の二代目岩茶の樹齢150年の大木が3本あった。背丈は7～8メーターほどで茶の木とはとても思えないが、葉っぱはギザギザがあり白い茶の花が無数に咲いていた。

　玉林と宗景は園長に二人の身分を明かしたが、園長は腰を抜かすほど驚いていた。そして、
「この武夷岩茶を武夷山を見つけた雅山園の八代目のお嬢様でそれに中国全土で話題の「禁断の恋」のお二人さま…それはそれはようこそ」
「実は、この茶の種や苗木を30年15回に渡って遣唐船で日本に持ち帰ったが、日本では育たないというのです。そこで私が武夷岩茶の盆景を日本に持って行きその種を育てて日本に茶を広げたいと思っています」
「日本に渡った茶の品種はどれもこの地で自生していたものでこの地の土壌を好みますが、他の地域でも栽培に成功しています」
「ほう…それを教えていただけませんか?」
「それは山の斜面の土が茶樹に合うかはまず椿の二年～三年物の若木を植えて試す方法があります。その椿が花を付ければその土壌は第一候補になる。その土壌を1メートルほど掘ったところまで表面近くと同じ土ならそこが茶樹に合う土壌になるが、深さが30センチほどなら根がその他の土壌に到着地点で枯れる、またこの土壌の地帯がどこまであるのかは何ヶ所も穴を掘らなければわからない」ということを教えてもらっていた。
　二人は茶の摘み方から手入れの方法や茶の収穫、蒸し方まで教わった武夷岩茶記念園での3日間だったが、充実した日を過ごして長安の盆景寺に帰ってきた。

小説盆栽物語　７話　椿の盆景が明懸尼寺を再興させた

　盆景寺に中国茶の元祖とも言える樹齢300年の武夷岩茶の盆景があるということから長安の茶の問屋や茶小売業の商人らが連日この武夷岩茶を見に訪れていた。このころはまだ拝観料というものはなかったが、寺を訪れた人々はお賽銭やお布施を持って来るのが決まりになっていた。そこで玉林と盆景和尚はお参りの人々に無料でお茶を出していたが、このお茶は長安の「茶卸小売商組合」からの寄付になっていた。この盆景寺の「無料茶接待所」が中国(806年)で初めての「喫茶店」で玉林(ユーリン)はこの茶店を「岩茶房」と命名していた。

　この盆景寺には盆景の500鉢展示場、盆景販売の他には八代目雅山が作庭した唐国一と言われている石庭があった。それ故、日に300人前後の参拝者があり長安の街の新名所だが、住職の盆景和尚が唐国の国宝でもある青龍寺の大曼荼羅を日本国に貸与して日本国官営の東寺の講堂に無事安置されるかの立会人を任命されて4年間も盆景寺を離れることになっている。

　そうなると盆景寺は無住職の寺になるが、この寺は日本国比叡山の唐国別院になるために盆景和尚が所属している西明寺からの僧侶派遣は叶わないことになる。仮に中国特有の賄賂とコネを使って僧侶も確保しても玉林が奥の院に住んでいる限り男性の僧侶ではなにかと問題が起こる可能性があり玉林と盆景和尚は頭を悩ましていた。

　そこで玉林と盆景和尚は空海に相談していたが、空海は、
「私の比叡山も盆景さんの西明寺も青龍寺も尼僧及び尼寺は認めて(当時は)いないが、洛陽にあった明懸尼寺（めいけんにじ）は尼僧のみの尼寺だと聞いているが、もうその寺は廃寺になっている」
「そうですか～それは残念です…」
「いやいや、その明懸尼寺に縁のある尼僧を探して明懸尼寺を再興させればなにも問題はない」
「再興ですか～もし再興できればその尼僧を盆景寺の住職にすれば…しかし、盆景寺は比叡山の寺です」
「いやいや、この寺はお主ら二人が一緒に住めるための便宜上の寺でもし明懸尼寺が再興できれば比叡山の寺額を明懸尼寺に書き変えれば明日にでも明懸尼寺になる」
「そんな簡単なものてすか?…お寺って?」
「いやいや、何百年続いた明懸尼寺を再興するということはその歴史のすべてを受け継ぐということですからそんな簡単なことではない」

　盆景和尚は急いで歩いても８日はかかるという洛陽の明懸尼寺にゆかりのある尼僧を探す旅に出た。洛陽の中心地に旧洛陽城の跡があり、その城の正門すぐ東に旧明懸尼寺跡(504年創建)の石

碑がありその脇には小さなお地蔵さまにはまだ新しい花が供えらていた。盆景和尚はこの石碑近くの家で明懸尼寺にゆかりのある尼僧を聞いたらすぐにわかった。

　その寺は通称「椿寺」という寺で旧明懸尼寺の本尊の観音菩薩立像を守っている無宗派の尼寺で住職は妙善という55歳だった。この妙善の話しを聞くと明懸尼寺そのものは130年前の洛陽城廃城と同時に廃寺になったが、その時の住職がこの民家を借りて御本尊と寺の歴史を書いた巻物、書物をこの家に隠していたといいます。それから誰となしにこの家を椿寺と言われるようになり、それが私の曽祖母で明懸尼寺の17代目の住職になりますので私は19代目の住職になります。

　盆景和尚は妙善にこの通称椿寺の由来を聞くと、
「元々の明懸尼寺には中国の珍しい椿が境内に21種類ほどありました。洛陽城が栄えている時は宮中の女性たちの守り本尊として明懸尼寺もそら～賑わっていたそうです。洛陽城が廃城と同時に明懸尼寺も取り潰されることになり、当時この寺の庭を手入れして頂いていた長安の造園業の雅山さんが将来再び明懸尼寺が再興される時のために境内のすべての椿の盆景を作っていただいたのですが、その盆景がある寺としていつの間にか洛陽の市民から椿寺と呼ばれるようになりました」
「ち、ちよっと待ってください。その椿を盆景にしたのは私の妻の玉林の父親で八代目の雅山の先祖になります」

　この奇遇に驚いた二人は思わず御本尊の観音菩薩さまに手を合わしていた。そして庭にある椿の盆景は130年前の21鉢のまま立派に存在していた。妙善はさらにこの盆景を今でも無償で手入れしてくれているのは雅山園で修行して洛陽で独立して造園業を営んでいる雅風園だということがわかった」

　盆景和尚は妙善に、
「私が明懸尼寺を探して来た目的は私の寺を明懸尼寺の再興の寺にしていただけることをお願いに来たのです」
「それは大変ありがたいが、盆景さまはどうなされます?」
「私は今年の10月から４年間日本国に盆景の普及の修行にでます。そして無事帰国すれば西明寺の貫主に内定しています。ですから明懸尼寺が再興されたらそのまま中国尼寺本山として末長くお使い下さい」

　妙善には一人の娘がいるが、この娘も300年の尼寺の歴史と寺の再興をするために私の弟子となり明懸尼寺がいつ再興されてもいいようにと仏教を学んでいます。その私の祖母もそうで母を弟子にしてこの小さな寺を守ってきましたが、わずか130年後にこうして明懸尼寺が再興されるのは観音菩薩さまのお陰ですと喜んでいた。盆景和尚は小さな椿寺でも洛陽から長安までの引越しは大変だろうと空海からせしめた銀4枚を妙善に手渡していた。

　盆景はもしあの時に空海に会わなければ私は人様から預かった銀の半分をかすめ取るという生臭坊主でこの先は賄賂とコネで生きていたかもわからない。何が証拠には私の懐にはその銀4枚がまだあったからだ、その銀を妙善に渡すと同時に盆景の気持ちが軽くなっていた。

　こうして観音菩薩さまの御導きで明懸尼寺として再興することが決まっていた。ただ長安に宗派の本山がある寺院は尼そのものを認めていなかったが、その西明寺の次期貫主と内定している盆景和尚が明懸尼寺を再興したことから尼僧及び尼寺をも認める風潮が各宗派にもそろそろ芽生えてきた。そしてこの作戦を考えた空海も日本に帰国すれば尼僧と尼寺の布教活動を認めようと思っていた８０６年５月になる。

小説盆栽物語　８話　玉林(ユーリン)に赤ちゃんが!　桓武天皇崩御

「禁断の恋」の玉林と盆景和尚に早く赤ちゃんが授かるようにと盆景寺にお参りにくる若い男女が増えてきたのは盆景和尚が日本に渡る日が近付いてきたからだ。今玉林の妊娠がわかったところで盆景和尚が長安を出発する10月15日までには産まれないが、せめて妊娠の兆候だけでも盆景和尚に知らせたいと盆景寺で玉林ご懐妊のための大法要が行われていた。

護摩を焚くのは日本国比叡山の大僧正最澄になるが、この寺の御本尊は最澄手掘りの薬師如来立像(後に中国国宝)に空海が拝むという大法要は長安の老若男女に知れ渡り、ついでに子供がまだ授からない若い女性にまだ孫が出来ないお年寄りまでが参加していた。それから数日で玉林が妊娠したということから盆景寺は名実ともに「子宝が授かる寺」として日本の寺だが、長安市民に愛されていた。

盆景和尚が日本に持ち帰る盆景は101鉢と決まっていたが、これを4隻の遣唐船に25鉢に分けて乗せるのはこの遣唐船4船団が無事に日本に帰れる確率は5割程度で2隻が沈没する覚悟になる。これは盆景に限らず空海が持ち帰る経典や書物、それに仏像や仏具までもなるべく4点を購入して4隻に分けて乗せている。船が沈没すれば乗せている荷物は全滅になるが船の乗組員や乗客は僚船に助けられるが、これも助かる確率は5割程度ですからもし無事に任務や留学をお終えて日本に帰ればそれなりの地位と名誉が待っていた。

ただ盆景は生きているので船の甲板に置けば波と潮風で枯れてしまう。暗い船倉に置けば日が当たらずにこれも枯れてしまう。したがって日が当たり波風が静かな時は甲板に、また夜は船倉にと盆景の世話をする人が一隻に一人としても盆景和尚の他に盆景の世話を出来る人が3名は必要になる。しかも、荒波の船の上の生活は早くて50日、嵐になると90日ほどの長い～船旅になる。

盆景和尚は雅山園の雅山にこのことを相談すると即座に日本からの第19次遣唐船で日本に帰る造園の修行のために長安に来ていた造園師を探してくれた。雅山は中国造園業組合の組合長で日本から造園修行に来る造園師の窓口になっていた。この造園の留学は4年間で2年ごとの遣唐船でほぼ10名が交代していた。

盆景和尚は長安在中で同じ船団で日本に帰る10名の造園師を盆景寺の奥の院に招いて妻の玉林の手料理と般若湯で接待していた。その場に空海も参加して内定している東寺の庭や石庭の話しをしていたが、日本に無事に帰れば我々この10名で官営東寺に相応しい庭を雅山さんが作庭したこの盆景寺のような日本一の庭にしたいと空海と同志の誓いをしていた。もちろん船の盆景は我々が責任を持って育てますと盆景和尚とも同志の誓いをしていた。

　さらに空海は玉林に、
「日本の国でどんなことが起こっても私が命を賭けて盆景和尚を4年後にはこの長安に帰れるようにします。そして第21次遣唐船には比叡山の僧侶10名をお供にして凱旋させますからどうか安心して盆景和尚の可愛い赤ちゃんを産み育てて下さい」
玉林は、
「ありがとうございます。まさか、わずか盆景さんと知り合って1年半ほどで盆景寺の建立どころか日本国の大僧正さまの護摩祈祷で赤ちゃんが…それに帰国すれば西明寺の貫主に…偉いお坊様が50年も70年もかかっても出来ないことを私たち夫婦は経験しました、ありがとうございます」
「いやいや、私も盆景さんの勘違いで日本にない盆景という文化を知り日本に持って帰れます。それにお茶という素晴らしい文化もです。盆景もお茶も日本の国の一千年後も中国文化として日本人に愛されます。それもこれも薬師如来さまの御導きになります」

　長安の空海に第50代桓武天皇が亡くなったという情報が届いたのが806年6月10日でその情報によると亡くなったのは806年4月9日だという。京の都から長安まで情報が届くのに約二ヶ月もかかっているが、これは超早くて稲荷神社の伊呂具が長崎の対馬まで空海宛の手紙を書いて使者を走らせ、唐国から対馬に来る海賊船に手紙を託してやっと届いていた。

　その手紙によると天皇は806年3月3日の自身の生前葬儀(柏原御陵)の花見の宴(桃の花)の後過労で寝込み亡くなったという。葬儀は仕来り通り行われ皇族、貴族は3年間喪に服し次期天皇は予定通りに平城天皇(第51代)、その即位式は6月8日に決定。さらに官営西寺東寺の総造寺司は守敏僧都で奈良仏教の僧侶ながら奈良仏教とは一線を画しているから安心なされよ。さらに、比叡山の僧侶たちはお主(空海)の命令を忠実に守っているから安心なされよ。尚、喪に服している間はお茶断ちの儀式があり遣唐船での茶の葉及び加工品は必要ないが、その後のために茶の種と栽培方法を持ち帰ること。伊呂具より

　空海はこの手紙を届けてくれた海賊の手下に銀二枚を手渡して稲荷神社宮司宛に手紙を託していた。この海賊だが、日本の遣唐船の水先案内も賄賂さえ出せばしてくれるので日本にとっては強い味方だった。この手紙には青龍寺から貸与された大曼荼羅の寸法が書かれてあってこの寸法が上手く収まるように西寺講堂の設計を守敏僧都にしてほしいと書いてあった。さらに最澄と私は20年間の留学を取り止めて第19次遣唐船で京の都に帰るので手筈通りお願いいたします。

小説盆栽物語　９話　空海屁理屈禅問答で盆栽は戦争をなくす

806年8月15日に洛陽の明懸尼寺から荷車5台の引越し荷物が盆景寺に届いていた。住職の妙善尼僧と娘で弟子の妙心の２人は1日遅れで盆景寺に着いて盆景和尚と玉林に赴任の挨拶をしていた。盆景和尚は妙善に、
「私は10月から4年間この寺を離れますが、奥の院には妻の玉林が住んでいますが、この奥の院を盆景展示場の事務所にします。妙善さんが持って来られました樹齢130年の椿の盆景21鉢もこの展示場に飾り玉林が世話をいたします。おそらくこの椿の盆景も長安の市民から愛されて連日この展示場も賑わうと思います」
「はい、ありがとうございます」
「そこで明日からこの寺も明懸尼寺となりますが、元の通称「椿寺」という名称は使われますか?」
「やはり長安唯一の尼寺ですから女らしい椿が...」
「そうですよね～それなら元の明懸尼寺のように中国中の珍しい椿を探して雅山園の八代目雅山さんが植えていただけるそうです」

504年創建で中国で唯一の尼寺「明懸尼寺」を再興させたのは事実上盆景和尚になるが、歴史上は第19代住職の妙善になる。この尼寺は無宗派となっていたので長安にある十宗派十大寺院もそろそろ尼僧を認めて尼寺を創建しょうと思っていた矢先に長安に明懸尼寺が再興されて渡りに船だった。それというのも宗派が尼僧を認めても尼僧を教育して一人前にする尼僧がいなかった。そこで十宗派大十寺院の尼僧学校の役割りを妙善にしてほしいという提案が来ていた。

妙善はこれを受け入れて各寺院推薦の尼僧修業者毎年5名を3年間教育したものに尼僧認定者と認めるとした。もちろん各寺院からは教育費として金が明懸尼寺に入るという仕組みを作った。この尼さん学校に入ろうと思えばまず各宗派の推薦がいるが、なにせこの中国は賄賂とコネでできていると空海がいったが、やはりこれは本当でこの件では賄賂の相場が銀5枚～10枚になっていた。

この理由はこの中国では僧侶が最も信頼される職業になるが、その上に女性がたった3年間修業するだけでお寺の住職になれるのは女性本人もそうだが、なによりその娘の両親が娘を宝塚歌劇団に入れるぐらいの熱い夢になっていたからだ。当然ながら僧侶に賄賂を贈るのは長安の大商人ばかりでなにかと寺には寄付、寄進してきたコネを最大限に活かしてきた。

この風潮には空海も盆景和尚も苦笑していた、なぜなら空海が青龍寺の大曼荼羅を日本に持ち帰る手段も盆景和尚が唐国の特使として日本に留学して帰国すると西明寺の大僧正(貫主)になると

いう計画もすべて賄賂とコネでできていたからだ。それを正論化して他人の賄賂とコネを批判するのはどうかと思っていた。

　そこで盆景和尚が考えたことは尼僧を内弟子にすれば寺の規模もあり5名となったが、これを通いにすれば明懸尼寺でも50名は収容できると尼僧大学を妙善に提案していた。妙善は、
「そうね～3年後ごとに5名の尼僧を誕生させてもこの広い中国では尼寺を復興させたとはなりません。最初は50名でもいずれ数千人の女子大学にいたしましょう」

　こうして誰でも入学できる長安尼僧仏教大学が発足した。仏教大学だから当然仏教を習うが、必須科目として水墨水彩画部、造園盆景部、茶道部を作り、水墨水彩部には盆景教授が教え、造園盆景部は玉林教授、茶道部は信心教授が教えることになった。この大学の尼僧募集には約1300名が殺到したが、この選考試験には賄賂もコネも認めなかった。

　空海と盆景和尚は奥の院で茶を飲んでいた。床の間には盆景が描いた水墨画の掛け軸、そして玉林が作った樹齢30年の果林の盆景には少し黄色く色付いた実が、そして玉林が淹れた岩茶だが、空海はこの空間こそが戦争もない病気も飢餓もない天国だと思っていた。この中国もそうだが、世界は権力者の思想や主張を通すために戦争を繰り返ししてきた。この先一千年間もまだ戦争は続き数千万人もの民が亡くなるが、ここには神も仏の力も及ばないのになぜ我々僧侶は仏さまを拝むのか?、盆景殿?

　そこで盆景和尚は正直に、
「私の家は貧乏で3食まともに食べたことは一度もありませんでした。そこでお寺なら3食に不自由はないと西明寺に入門しましたが、これは口減らしのようなものです」
「ほう、それは正直でいい。今度の尼僧大学の入学面接試験でもそのように答えた女性を入学させたい」
「それは何故?ですか?」
「たとえば私は貧乏な人や病気で苦しんでいる人々を助けたいという思想を持つ人は必ずこれを実現させたいと権力を持ちたがりますが、この権力こそ戦争への道になります」
「し、しかし、その思想は私にもあります」
「そか、それなら何故?、盆景さんは盆景や水墨水彩画、それに茶を日本に広めようとしているのか?」
「そ、それは日本の人々が趣味を持って楽しく暮らせるように願っているからです」
「そう、人々が楽しく暮らせば戦争はなくなると私も思っている。つまり、ここには権力を行使しなくても人々が平和に暮らせるという意味でこの奥の院の今の空間が天国だと思った」
「そうか～ここの今が天国なのか～」
「そう、尼僧大学に入学した女性たちが仏教を知る以上に読み書き、盆景造園を習い、水墨水彩画の一つでも極めればこの国の文化に役立ち声高に権力や権利を主張しなくても文化芸術で表現

出来るものだ」
「そうか～文化芸術スポーツが発展すれば必然的に貧困は減るし、人々がより楽しく暮らせます。つまり、盆景を育てることが戦争をなくすということですね」
「そうだ!、戦争前夜の時は必ず盆景の趣味や道楽も廃れる」

　玉林はこの二人の屁理屈禅問答をおもしろおかしく聞いていた。そして手作りの料理と般若湯を持って来て、
「でも～屁理屈でもなんでも戦争に反対することはいいことよ…たしかに正論はそれなりに正論ですが、正論同士のぶつかりで朝鮮半島では戦争が絶えないし、この唐だっていつまた戦争になるかも分かりません。賄賂やコネの政治はたしかに批判はされるが、戦争を回避のためならそれも必要になるかも…」
「私の日本だってこの唐の国にいつ侵略されるか分からないので2年に一回はご機嫌とりのために皇帝に遣唐船4隻満杯の貢ぎ物をしている。これも正論からいえば屈辱外交になり、しかも日本国の国家予算の2割が遣唐船の費用になるが、これも戦争回避のための賄賂になる」
「そうよね～長安の若い女性たちが大学に通い、こういう話しを勉強すれば正論の仏教の講義よりよほとおもしろいのよね～あらら…二人の偉いお坊さんの前で…失礼…」

　こうして長安尼僧仏教大学は中国初めての女子大学になった。授業料は格安に設定されて唐国十大宗派十大寺院がそれなりの負担をしているが、これらを提案した空海も日本に帰れば自分の宗派(真言宗)を立ち上げて尼僧大学を作ろうと思っていた。

小説盆栽物語　１０話　玉林、盆景和尚長安での最後の別れの夜

第19次遣唐船の帰りの船に荷物を積む段取りが行われていた。もう19回目になると長安の輸送業者も慣れたもので約200台の荷車やそれを押す人夫は荷車一台に3名だが、それだけで600名にもなる。これら荷車を長安の帰国者の活動、研究、修業の場に配車して日本に持ち帰るさまざまな物資を梱包しなければならない。

玉林の盆景展示場にも輸送業者が盆景の鉢植え101鉢を輸送する打ち合わせに来た。この盆景は生き物なので長安を出発する10月15日の早朝に荷車に積むことになった。荷車は2台で荷台を二段にしてそれぞれ25鉢を並べればなんとか積むことができるか、輸送業者は玉林に、
「明州の港までは陸路で35日を予定しています。上の段の盆景は強烈な陽射しを受けて下の段は日が当たりませんが、それに水をやらなければ枯れてしまいます」
「それは盆景和尚と日本に帰る造園職人が盆景の世話をしますから安心して下さい」

この長安の輸送業者は荷車や人夫の手配から日本に帰る約200名35日の宿泊と食事の手配までしていた。そして日本へ帰る荷車と人々と同じ日に隊列を組んで出発するのは山賊や野盗から荷物と人命を守るための防衛手段だった。そして明州の港では一旦荷車の荷物を倉庫に入れて明州の役人の検査を受けることになっていたが、この盆景を日本へ持ち帰る許可がでるのかは分からない。そこで盆景和尚は下級役人用に銭100文、中級役人用に銭200文、上級役人用に銭500文を賄賂で渡す準備も忘れなかった。

第19次遣唐船が明州港に着く予定日は806年11月20日前後とは一応なっていたが、その船が明州港に着くとやはり荷物は一旦倉庫に入れて役人の検査になる。船は修繕を終えて水や食料品を積んでから帰りの荷物を積むことになっていた。そして唐国の皇帝への貢ぎ物をまた長安から来た輸送業者が長安へ同じ用に輸送するから長安の人夫は早くて80日、船が荒れて遅れれば100日ほど家には帰れない過酷な仕事になっていた。この遣唐船にかかる諸費用(賄賂を含む)は日本国の年間予算の二割ほどになると空海はいっていた。

盆景和尚が長安を出発する日まで10日と迫っていたが、この日、明懸尼寺尼僧大学第一期生の入学式が行われていた。場所は青龍寺の大講堂で尼学生は50名となり父兄はこの娘の晴れ舞台を見るために学生の10倍ほどの動員数でこの唐国での僧侶がいかに人民から信頼されているのが良くわかる。それを象徴するかのように名誉学長には皇帝の皇后がなり、その皇后がこの入学式に参列していた。

また来賓の大僧侶は青龍寺の恵果と唐国十大宗派十大寺院の貫主が参列、それに日本国から最澄、空海だから長安の人々からは坊主の万国博覧会だと言われるほどの大盛況だった。さらにこの入学式の進行及び司会は次期西明寺貫主に予定されている盆景和尚となっていた。つまり、唐国の皇后から長安十大寺院の宗派のすべての貴賓の前で盆景和尚が日本から帰国すれば西明寺の貫主になることを披露したことになるので盆景和尚が日本にいない間にいかなる勢力の動きがあっても今日この日の入学式に参列したすべての人々が応援してくれるという空海の大演出だった。

空海は日本の仏教家だが反戦思想の政治家だった。戦争とは権力の奪い合いであって相手に隙あらばそこを突かれて戦争になるという理論を確立していた。ならば隙を与えないためには何をするのかというと中国なら人民から圧倒的な支持を集める。日本なら農民から圧倒的な支持を集めるという結論に達していた。その農民から支持を集めるためには仏教を利用するというおよそ仏教家ならぬ考え(思想)を持っていた。

今回の明懸尼寺尼僧大学の入学式の演出も盆景和尚が4年間も日本を離れればそこに「隙間」が出来る。その隙に乗じて西明寺の権力争いになるのは空海には見えていた。この戦争は武器を持たないが戦後には必ず不幸な人々が出るのを事前に防止するのも仏教の教えだと信じていた。空海が20年間も比叡山を離れるが、比叡山の僧侶にはこの20年間山を降りるなと命令したが、これも宗教戦争回避、京の都が火の海にならないための作戦だった。

玉林のお腹はふっくらと目立つようになっていた。出産予定日は806年12月中旬となっていたが、12月中旬といえば盆景和尚が乗った遣唐船はまだ海の上だという話しを玉林と盆景はまったりしていた。わずか1年前に盆景寺と盆景展示場が発足したのにもう境内には岩茶房の茶店、唐国一の石庭、それに明懸尼寺尼僧大学の学生で連日賑やかになった。これもあれも空海さんのせっかちなお人柄だと笑っている玉林に盆景は、
「空海さんは20年間の留学の成果を2年間で学ぶつもりだから、どうしてもせっかちになるといっていた」
「私たち夫婦は空海さんに何をお返ししたらいいの?」
「それは…玉林が元気な赤ちゃんを産み私が帰って来るまで育てることかな～」
こうして玉林と盆景はもし赤ちゃんが女の子だったら「玉花」、男の子だったら「空景」と名付けようと長安での最後の夜を楽しく仲良く過ごしていた。

10話のあとがき★☆★昨年11月の京都盆栽大観展を鑑賞して感動した直後から書き始めたこの「小説盆栽物語」も10話になりました。私も今年から小品盆栽を始めようと近所から種を集めています。それはナンテン、ナツメ、ドングリ、キンカン、ギンナン、フユサンゴ、カキ、マサキ、サザンカでそれぞれ４粒です。そして安い小さな鉢も50鉢揃えました。さて、芽がでて花が咲く

でしょうか?、この先、これらを盆栽にする方法はこれから勉強いたします。いつも私のつたない小説を読んでいただきありがとうございます。

小説盆栽物語　１１話　最澄、空海官位剥奪の上５年間謹慎処分

806年10月15日の早朝には長安の西の端明懸尼寺に日本に帰る学者や医師、それに各種技術者など約200名が集まって来た。それらが日本に持ち帰る物資は200台の荷車に積み込まれその荷車を押す人夫は600名で総勢800名の隊列は3キロほどになった。これから約1500キロ先の明州港から第19次遣唐船の帰りの船に乗るためだが、この唐国の首都長安から一番近い港まで1500キロもあるのは外敵から首都を守るためだが、首都長安に外国から、または長安から外国に物資を輸送するにはかなり不便になる。

長安から西100キロには次の都市の洛陽がある。ここから杭州まで約1000キロの運河はあるが、この運河の船に荷物を乗せ変えればかなり輸送は楽にはなるがこの船には乗客は乗せないために荷物がしばし行方不明になる。この原因は船の転覆や船を操れる山賊に船ごと盗られるために日本に持ち帰る大事な荷物はやはり陸路が一番確実で安全な輸送になっていた。

この隊列の先頭は盆景を乗せた荷車の2台で盆景はこの荷車ともに洛陽街道を西に向かっている。10月15日に長安を出発して峠を越えればそこには村があり、その村の先には10万～20万の地方都市の武漢がある。また峠がありその先には地方都市の杭州があり、この繰り返しで11月18日(34日目)には最後の宿泊の地方都市に何事もなく着いていた。ちなみにこの頃の京の都の人口は約15万人でこの唐国では人口15万程度の地方都市は100を越えていた。

盆景がこの街道を往復するのはこれで3回目になる。盆景は15歳で西安の西明寺に見習い修業僧侶で入門したが、なんとなく要領がいいのか18歳で最初の僧侶試験に合格している。その3年後には明州港の近くの一品寺の副住職に派遣されてその1年後に住職が亡くなった。そのまま住職に任命されて西明寺の末寺では一番出世でその3年後には幹部の試験に合格して西明寺本山の定員25名の25番目の末席だが宗議員になっていた。この末席だがこれが盆景和尚の運のいいところで唐国は賄賂とコネでできている国だが、いくらなんでも平の僧侶では出世の道はない。

この直後に日本から来た空海が住職の宗景を訪ねてきたのがわずか一年半前だった。その寺の住職は今でも盆景でいずれ西明寺の貫主になっても盆景の自坊となる。11月19日に予定通りに一行は明州に着いたが、日本からの第19次遣唐船船団4隻はもう3日前に無事に着いて積み荷は倉庫に入れられて船の修理も終了して明州の長官の許可があればいつでも積み荷を積んで日本へ向けて出港出来る状態だった。とりあえず盆景と最澄と空海は一品寺に宿泊することになった。

この明州の寺から西明寺の貫主が排出されるのはこれまた明州としては名誉のあることで盆景と顔馴染みのある明州の長官が盛大に祝ってくれた。場所は明州一の中華料理飯店で主役はもち

ろん盆景次期西明寺貫主で貴賓席には最澄、空海も招かれ出席者は900名と明州では最大の祝賀会になっていた。この唐国にではこういう宴会が人脈、それにコネ作りの場になり、明州の公務員の長の長官から各部署の幹部までが、順番に盆景に祝辞をいうために列を作っていた。

何番目かに明日日本へ持ち帰る積み荷を検査する港湾検査官の長が盆景に挨拶にきた、盆景は検査官長に、
「明日の日本へ持ち帰る荷物の検査を宜しくお願いいたします」
「もちろんです。もう輸出の許可は盆景101鉢を含めてすでに許可は出しています」
「ありがとうございます」
「ところで私の孫娘が尼僧になりたくて長安の尼僧大学の入学試験を受けたのですが、残念ながら落ちてしまったのです…なにか?補欠入学とか特別枠というのはありませんか?」
「そうですね～もう開校して二ヶ月になりますから来年の入学には私が推薦状を書きますから特別枠ということで入学を認めます」
「ありがとうございます」

次に盆景に挨拶に来たのは明州の副長官と盆景が住職をしている一品寺の総代でこれらも孫娘の尼僧大学への裏口入学の斡旋だった。盆景はこれには嫌な顔一つしないで特別枠での入学を認めていた。もちろん盆景は心の中ではいい気分ではなかったが、これらを否定したら必ずや反盆景派ができる。そうすれば反対に新たな利権を求めて盆景擁護派できる。そうなると派閥争いの先には戦争が待っていた。この中国の歴史そのもののすべてがこの経緯で戦争になっていた。

この盆景の祝賀会のような盛大な宴会は大きな都市では名目は結婚式でも葬式でも良く月に一回は開催されていた。ここで人脈作りやコネ、賄賂などの土壌が育成される官民共同の異業種交流会になる。これはその都市が派閥で分裂しないための一種の人民同士の悪い連帯心で結ばれている習慣になる。日本でいえば「桜を見る会」になる。

そのあくる日の早朝に第19次遣唐船の日本代表大使の従三位の藤原常嗣が一品寺の最澄と空海を訪ねて来た。最澄も空海も常嗣とは親しい関係だが、いつもの常嗣らしくない礼儀正しい言葉使いになっている。常嗣は、
「本日は平城天皇の勅使できたのです」
といいながら、書状を広げてそれを読もうとしたが、この仕草が面白くて最澄も空海も笑い転げていた。同席していた盆景和尚もしっかり日本語が分かるようになって一緒に笑っていた。

常嗣はこの笑いにつられて天皇の勅使らしくない言葉で、
「実は朝廷内部で最澄と空海は20年の留学を途中で止めてたった2年で帰ってくるのは不謹慎でもし私がこれらを確認すれば即刻この天皇からの命令をお主らに執行せよということですが、やっぱり私の乗って来た船で帰られるのですね?」

「まあ～そうです～だからこの港にいます」
「それは私も困るのですが、一応、天皇からの命令を読みます。一、最澄の官位従六位を剥奪した上に806年12月1日から5年間比叡山で謹慎。一、空海の官位従七位を剥奪した上に806年12月1日から5年間太宰府博多港で謹慎。一、最澄、空海の持ち帰りし仏像、経典などのすべては没収して官営東寺の講堂に収納すること。平城天皇　とあります」

　そこで空海は、
「そか、これは命令だから守るが、幸いに持ち帰る物は東寺に収納とは嬉しい話しだ!」
「そうです、これは皇太子の源神野さまが、強く希望されて実現したのです。天皇の愛妾の薬子さまや奈良仏教系の公家は最澄さんも空海さんも死罪か島流しを希望していました」

　空海は常嗣に赴任先の長安でもし困ったことがあったら造園業の八代目雅山さんになんでも相談するようにと雅山に手紙を書いて長安に着いたら真っ先に渡すようにと指示をしていた。盆景和尚は尼僧大学の妙善に尼僧裏口入学の推薦の件の詳細を詳しく書いていた。そして愛妻の玉林への手紙もこの常嗣に託していた。

　806年11月22日に最澄と盆景和尚は遣唐船第一船に、空海は第ニ船に、日本に持ち帰る盆景の100鉢は25鉢を四隻に分散して樹齢300年の岩茶は盆景和尚が世話するために第一船に積まれて明州の港を出航していた。

小説盆栽物語　１２話　遣唐船嵐で二隻難破、空海長崎で説法会

806年11月21日に明州の港を出港した遣唐船4船団は真っ直ぐ対馬を目指していた。この航路は目印の島がなく星座が唯一の羅針盤だったが、この時期は比較的海は穏やかで熟練の船長と乗組員30名は一番早い航路を選んでいた。最澄も空海も天文学や気象学を学んでいたが、やはり、こうして星座を頼りに星明かりだけで暗い海を航行する乗組員を尊敬しながらも最澄と空海は実践の天文学、気象学と航海技術を船長から学んでいたので退屈はしなかった。

4隻の船の乗客は学者、医師、土木設計技術者、造園技能士などそれぞれの専門家ですべて官位がある公務員で朝廷から遣唐使を命令されてそれぞれの年数の任務を無事終えて日本への帰路だった。彼らの部署の長の官位はすべて従三位以上で随行員も従五位以上と最澄の従六位、空海の従七位とはかけ離れた高級貴族になる。彼らが無事日本に帰れば最低でも官位が一階級上がるのは間違いはない。

しかし、この遣唐使を自分から志願する貴族はもちろんいないからある面ではこの遣唐使に選ばれた高級貴族と随行員の貴族はいわば左遷扱いになっていた。最澄や空海の身分は民間人だが、朝廷は民間人の僧侶や宮大工や医師、造園師なども遣唐使として積極的に留学させ唐国の文化を持ち帰らせていた。もちろんこれらも公務として留学費等々は朝廷が出していた上に無事帰れば官位従十二位(最下位の公務員)のご褒美が待っていた。

船団は大陸と対馬の中間点まで嵐にも海賊にも遭遇しないで順調に12月1日の朝を迎えていた。この一日というのは平城天皇の命により最澄と空海が官位を剥奪される日でこの日から無位の僧侶になっていた。第一船には最澄、盆景和尚と樹齢300年の岩茶の盆栽と樹齢100年以上の盆栽が25鉢乗っていた。これらの盆栽は暗い船倉で二段に積まれていたが、盆景と日本に帰る造園師の手で昼間はなるべく日光浴をさせてなんら平地と変わらないようだった。

盆景も乗客の中の日本の専門分野の学者から色々なことを教わり船の旅を楽しんでいた。最澄も空海も酒好きで信じられないほどの酒の瓶を船に積み込んでいた。これは自分で飲むだけでなく乗客や乗組員にも飲んでもらい比叡山のことを宣伝、または人脈作りの戦略でもあった。第二船でも空海が最澄と同じことで人脈を広げていた。その中で高級貴族で従三位の藤原弘成と空海は気が合い、夜になるとどちらかが酒を誘っていた。そんな中で弘成に実は空海は官位を剥奪された上に博多で船を降ろされて5年間謹慎させられると打ち明けていた。

弘成との話しの中でこの弘成の弟の従三位の広活が太宰府の長官(九州地区総括本部)をしていることが分かった。弘成は船が博多港に着くと荷揚げや水、食料の補給に2日間は停泊する時に空海

を広活に紹介すると約束してくれた。この太宰府や九州には比叡山の末寺はなく奈良仏教の独壇場だった。空海は都に帰ると同時に最澄から独立して新しい宗派の真言宗を立ち上げる予定をしていたが、博多で足止めの予定になっていた。

　九州には奈良仏教系の末寺が約450寺ほどあったが、これは最澄が天台宗を立ち上げる前は仏教といえば奈良仏教の系列しかなくやむを得ない。最澄も空海も最初に入門したのはやはり奈良仏教になる。空海はこの博多での謹慎処分を神から与えられた千載一遇の出来事と捉えて空海の真言宗の布教を九州全土に広げると誓っていた。

　船団はまだ対馬の島影が確認されない深夜に嵐に遭遇した。この嵐を事前に予測していれば小さな無人島の島影に錨を降ろして待機できるが、この時は不意打ちで嵐に見舞われていた。この嵐で第三船と第四船が転覆して乗客と乗組員の約200人が海に投げ出されていた。第一船と第二船で付近を捜索して板切れ、積み荷などに掴まり漂流している人を丸二日間探して助けたが、この結果56人の行方不明者が出たと船長が航海日誌に記録していた。最澄と空海はこの船の遭難現場で一昼夜通して祈り続けていた。

　残った船団二隻は西に大きく流されて当初予定の寄港地に決めていた対馬から五島列島の福江島に変更して福江島大宝港に807年1月3日に寄港していた。この港でも3日間停泊するために最澄と空海は大宝寺を訪れていた。この大宝寺は奈良仏教三輪宗の九州別格本山で住職は道重で最澄と空海とも若きころ同じ寺で修行し仲間だった。その後、最澄は比叡山で修行して天台宗を立ち上げ、空海は最澄の弟子になり、道重は九州本山へ赴任していた。

　この大宝寺の九州地区の末寺は九州だけで125ヶ寺もあり奈良仏教の九州地区の末寺455ヶ寺の約三分の一の勢力になっていた。道重貫主は奈良仏教と対峙する比叡山の最澄、空海と唐国の僧侶大使の益景和尚が大宝寺に表敬訪問したことに驚いたが、道重は丁重な扱いだった。空海はこの九州で自ら立ち上げる真言宗の布教をするために太宰府に真言宗創建の寺を建立することを道重貫主に打ち明けて理解を求めていた。

　福江島に停泊中の最後の夜には空海の説法会が予定されていた。道重は傘下の125ヶ寺の末寺の住職にこの空海の説法会に参加するようにと空海が大宝寺に到着と同時に各寺に通知を出していた。この九州には奈良仏教六宗派七大寺院の貫主や幹部はまったく布教するために訪れたこともなく九州仏教会は奈良の本山への不満が長年蓄積していた。そんな折に京の都の官営東寺の官主に内定している空海の説法が聞けるというこで末寺の僧侶ばかりかこの末寺の檀家総代まで説法会に参加していた。

小説盆栽物語　１３話　空海真言宗を開山、1月7日は「盆栽の日」に制定

807年1月6日の長崎大宝寺での空海の説法に集まったのは三輪宗九州別格本山大宝寺の末寺125ヶ寺の住職や副住職、そろぞれの檀家総代など350名の参加で始まった。壇上には天台宗貫主の最澄と唐国からの仏教大使の盆景和尚、まず司会の大宝寺の貫主の広重から空海が紹介された。
「私達奈良仏教からすれば天敵とされている比叡山天台宗の最澄大僧正の一番弟子の空海さんが唐国から帰国されてこの福江島で天台宗から独立されて真言宗をこの日、この時間、つまり、今から真言宗立ち上げの宣言をされます。そして真言宗立ち上げの第一声の説法会を開催いたします」

そして紹介された空海は、
「我が真言宗は民衆を救い民衆の幸せと国家安泰を願う教団とすることを誓ってここに新宗派発足を宣言いたします。この発足立ち会い人は、ここに列席されている皆様のすべてになりますので宜しくお願いいたします」
空海の新宗派発足宣言には仏教の発展、自らの真言宗発展という言葉はなく一に民衆、ニに国家、この発展があれば自然に仏教も真言宗も発展するということをこの後の説法会で2時間もの説明をしていたが、最後の締めくくりに、

「私は仏教徒ですが15歳から2年間稲荷神社で神道の修行もしてきました。この稲荷神社も民衆を救い民衆の幸せ、国家安泰を願い発足した真言宗と同じ当初は新興宗教になります。稲荷神社の信者は農民が多いので民衆の幸せとは農民の幸せにもなります。農民の幸せとは五穀豊穣で病気も戦争もない生活になります。そこで稲荷神社の神職は五穀豊穣を阻害する根本原因の究明や病気にならない環境などを農民の代わりに勉強をしてそれを実践してその成果の一部分をお供えとしていただきそれで神社を運営しています。稲荷神社は公卿や貴族からなんら援助もなく立派な桜門や見事な社殿を建造していますが、これすべては農民からのお供えになります」

「一方の我が国の歴史ある既存の仏教は朝廷から寺領を頂きその金で民衆や農民の幸せや国家の発展を望んでいるならまだしも農民が汗水垂らして働いた米を朝廷より高い率の年貢を強制的に割当てて取り上げる行為、また仏教の法事等の名目で各村から強制的に金を巻き上げる行為は仏教ではなく地獄の使者になります。寺で修行という名目で仏像を拝んでいても絶対に豊作にはなりません。僧侶は農民の幸せを阻害している根本原因を排除するためには農業学、植物の疫学、土木工事と水質、天文学、気象学、地質学、医学、薬学などの研究者にならなければならない、末寺は大学、本山は大学院にならなければならない。日本各地の農民はそれらの大学の研究を活かして働くというのが私がいう真言宗の教えになります」

この説法の終わりには大宝寺の本堂が揺れるほどの拍手が起こっている。司会の広重は、この時とばかりに、
「実は私はこの空海宗祖のお話しを2日間聞いて決心したことがあります。それは私はこの三輪宗の僧侶から改宗して真言宗の僧侶になりました。そしてこの説法の前に大宝寺の檀家の皆様に相談したところ檀家のすべての人々から改宗を認めて頂きましたのでこの寺を今から「真言宗九州別格本山大宝寺」として発足いたします。現在お集まりの末寺125ヶ寺のご住職のご意見をお聞きいたしますが、いかがなされますか?」
の問に改宗反対の意見など述べる雰囲気はなく全員挙手で九州別格本山大宝寺は807年1月6日に真言宗発足第一番の記念の開祖寺根本道場として登録されている。たった一日で大宝寺とその末寺125ヶ寺を真言宗に改宗させた空海を太宰府の貴族は比叡山の天下は近いと悟り何かと便宜をしてくれた。

その明くる日の7日、大宝港には遣唐船が唐国から持ち帰った樹齢50年～300年の盆景を見るために九州全土から造園師が集まっていた。盆景鉢は101鉢を船に積んだが50鉢は海に沈んで残った51鉢になる。この盆景を見るのは初めての造園師の質問に盆景和尚は親切丁寧に作り方を説明していた。盆景和尚は造園師らの真剣な眼差しに負けて樹齢300年の松と樹齢50年でもう蕾が膨らみかけている白と赤の梅の3鉢の盆景を大宝寺に寄付すると申し入れていた。

この盆景の世話は長崎から唐国へ造園の修行をしてやはり帰りの船でこれらの盆景の世話をした造園師が大宝寺でも世話をすると申し入れがあった。日本人にすればこの奇妙な盆景だが、この紅白の梅の盆景を都から太宰府に赴任している高級貴族にとっては華やかな都の屋敷の梅を想像してかひと時の慰めになりこの盆景の梅を見るために大宝寺に押し寄せる騒ぎにもなっていた。

こうなれば造園業者は梅の盆景を生産するのが自然になるが、なぜか九州の造園業者は盆の中にある景色を盆の中の山を創造してか?、この中国語では盆景だがこれを「盆山」(ぼんさん)と呼ぶようになっていた。また一説では中国の坊さんが大宝寺に持ち込んだので「坊さん」になったともいうが、この盆山は江戸時代から明治まで使われていた。この盆景が日本の長崎に上陸したのが、807年1月7日になるのでこの日を「盆栽の日」と空海が命名していた。

遣唐船二隻は長崎から次の寄港地の博多港に向かっていた。この遣唐船が必ず博多港に寄港するのは九州を統治する太宰府から都に帰る貴族、それに米以外で納入された年貢の金、銀、刀などの美術品などを積み込むための定期船にもなっていたからだ。さらに九州からの郵便物を都の商店や寺に運ぶ郵便船にもなっていたが、空海が三輪宗の別格本山大宝寺と末寺125ヶ寺ごと乗っ取ったことの事件は他の宗派の寺から三輪宗本山の大安寺への報告の手紙もこの船に乗せられることになる。

1月11日に遣唐船二隻は博多港に付くが、港には朝廷から連絡があり、太宰府の役人ら30名が空海が船から下りてくるのを待っていた。その船からは太宰府の長官の兄で従三位の藤原弘成が空海と談笑しながら下りてきたので長官の広活は久し振りに兄に会えた嬉しさと朝廷の罪人である空海を見比べて不思議そうな顔をしていた。長官は取り敢えず空海、最澄、益景和尚を博多港の高級料理屋に案内していた。

空海は中国のことを「この国では賄賂とコネがあればできない事はない」と学んできたが、我が国では賄賂、コネより「人脈」が物を言う国だと今頃悟っていた。本来朝廷の罪人だから、こんな長官と酒を高級料理屋で飲める身分ではないが、長官は兄の遣唐船友達というより、つい四日前の長崎での大宝寺と末寺125ヶ寺乗っ取り事件の空海に尊敬と警戒の意味で仲良くなりたがっていた。これも広活からすればやがて都に帰ることになれな空海との人脈を大事にしたい意図がある。

長官は空海に「太宰府の観世音寺に5年間幽閉ということですが、我が国は政教分離ですから宗教の布教活動なら九州地区を自由に歩いて下さい」とまでいい空海を後押ししてくれた。

小説盆栽物語　１４話　盆栽無事京の都に、その夜、比叡山燃える

空海を博多港で下ろした遣唐船第一船と第二船は瀬戸内海を難波港へと航行していたが、波風は安全とはいうものの岩礁がアチコチにあるために夜明けから日没までの航行しかできなかった。それに潮待ち風待ちで船内では最澄と太宰府での任期が終わって都に帰る高級貴族との顔合わせの宴会が連日開催されていた。

思えば奈良の平城京時代ではやはり奈良仏教の幹部らが連日連夜高級貴族との宴会で賄賂やコネ、人脈を活かして政治を奈良仏教の都合のいいように動かしで来たからこそ奈良仏教は莫大な権力と富を貯め込んでいたが、稲荷神社の宮司の父親はこの奈良仏教と権力の癒着を指摘して奈良仏教の刺客に殺されている。このことがあって同じ平城京の役人だった息子の伊呂具も危険を感じて一族を連れて藤森神社に逃げて来ていた。

この藤森神社の北の端にある伊奈利山の小さな「藤社」という祠を藤森神社から借りて新興宗教の稲荷神社を立ち上げていた。最澄も奈良仏教の末寺に入門したが、伊呂具の父親と同じ理由で奈良仏教を批判して比叡山で新興宗教の天台宗を立ち上げていた。当時の平城京の天皇は桓武天皇で桓武天皇も奈良仏教の暴走(武器を持っての僧兵を組織して貴族を威嚇)をなんとかしたいと思い稲荷神社の伊呂具にこの問題の解決方法を加持祈祷で占ってほしいと密書を送っていた。

その伊呂具の加持祈祷の結果は奈良を捨てて京に都を遷都することだった。つまり、奈良仏教と奈良仏教系列高級貴族と分離することで奈良仏教の力を弱める大作戦だった。そして奈良仏教が僧兵を使って奈良から貴族に圧力をかけるが、この圧力に対抗するために最澄は比叡山にも同じ兵力の僧兵を組織していた。最澄はこんなことを思い出しながら、賄賂もコネも人脈も肯定はしないが、民衆を救い幸せにするためには高級貴族に近付いて貴族を洗脳することも大事だと連日連夜の船の中での宴会を正当化していた。

盆景和尚が日本の港に着いた時の第一印象は人が少ないことと京の都に通じる街道にすれば道幅も狭く荷車の二台がすれ違いができない場所もあったのには驚いていた、それに険しい山はどこを探しても見つからずなだらかな丘があるだけだった。それに都から流れて来るという淀川も盆景和尚の唐国の尺度からすると小川であった。その淀川沿いの街道には松の木が植えられて日本人は松が好きなら松の盆栽が好まれるかと少し安心していた。

都に帰る隊列の先頭には最澄が30名の役人に囲まれて歩いているが、盆景が最澄の側で話しかけても役人は無視してくれている。やがて隊列は淀川の八幡から橋を渡り西国街道に入るが、この街道の西側の丘陵地には13年前には長岡京があったと最澄は説明している。その長岡京跡には

建物はなく田畑が西山の麓まで続き竹藪と竹藪の間に農家があり、その前の畑では農民が農作業をしていた。

　西国街道をさらに北へ歩くと桂川を渡る久世橋があるが、最澄は橋の上で立ち止まり西山、北山、東山と指を指して盆景に説明をしている。最澄は北東の一際高い山が比叡山で私の天台宗の本山がある、寺とお堂は根本中堂を囲むように250(その後500ヶ寺になる)ほどあると説明をしている。盆景は、
「ここからはまだ宮殿は見えませんが、あの高い山なら宮殿や皇帝を見下げることになりますが、唐国では到底考えられないことです」
「いやいや、日本でもそれが大問題になったが、私はあの比叡山は京の都にあるのではなく隣の近江の国にあるのでその指摘は当たらないと反論してそれを認めさせた」
「そうでしたか…それなら天台宗本山の山門は近江の国にあるのですね」
「そう、坂本に門前町はあるが、私は今夜から京側の朝廷から登山を禁止されている雲母坂登山口から山に帰ります。盆景さんも今夜は比叡山を見ながら般若湯を飲んでゆっくり旅の疲れを癒やして下さい」

　一行は西国街道の京側の入口の九条大路に突き当たるが、そこは官営西寺の西の端で南大門の北側には金堂、講堂が見える。これは大きさ屋根構えまで盆景和尚の本山の西明寺や青龍寺とまったく同じで日本国の遣唐使が今まで18回も長安を訪れてはいるが、これらの巨大な建造物を模写して技術を日本に持ち帰ったと思うと日本の学者や僧侶はすごいと感心していると最澄は、
「いやいや、それだけでなく日本は唐国から漢字という文字に仏教、それに通貨の銭まで持ち帰って日本の通貨としている。京の都の碁盤の目と言われている町筋も洛陽の町筋を僧侶が書き写して持ち帰ったものだ、それに盆景さんが日本で広めようとしている盆栽や茶の栽培、それに水墨画もいずれ日本から古くからある文化になる」

　官営西寺の東には羅城門を挟んで東寺がある。この東寺の講堂に最澄と空海が唐国から持ち帰った立体大曼荼羅や仏像、経典から仏具までを朝廷が没収して一旦保管するための時間待ちに最澄は東寺南大門の前にある空海ゆかりの九常寺に立ち寄り住職の戒本にこの寺は今日から真言宗の128番目の「真言宗九常寺」になる。その寺の住職は盆景和尚とするが、前の住職の戒本は東寺塔頭の筆頭塔頭寺院の住職及び東寺塔頭建造総責任者とするの栄転を命じていた。そして最澄は堂々と凱旋門(羅城門)をくぐり朱雀大路から比叡山に帰っていた。

　盆景和尚はこれらの引き継ぎをして最初の仕事は荷車に積まれた47鉢の盆栽を降ろすことだった。どの盆栽も三ヶ月振りの土の上だがそれぞれ元気で樹齢100年の白と紅の梅はもう花を咲かして良い匂いを唐国から京の都へのお土産としていた。これらが一段落すると前住職の戒本が般若湯(僧侶の薬酒)と「山薬」という鍋料理を持ってきた。その戒本が「山薬」は山にある僧侶だけの特効薬でこれを俗世間では「牡丹鍋」というと笑かしてくれた。盆景和尚も最澄さんと空海さんと

知り合ってまだ2年ほどだったがその2年間で般若湯を飲まなかった日は一日もなかったと今度は盆景和尚が戒本を笑かしていた。

　この二人が般若湯を飲んでいるのは住職の宿坊で庭には小さな池がありこの池に反射する月明かり、星明かりだけで貴重な行灯の油も要らない。戒本は北東の上空を指差して昼間ならここから比叡山がくっきり見えるが、というなり…腰を抜かすような声で…
「お山が…比叡山が燃えている～」

　最澄が比叡山の京側の登山口の雲母坂に到着すると同時に大歓声が沸き起ったと同時に比叡山の頂上から麓の参道口まで松明を持った1000名の僧侶が一斉に松明に火を着けて最澄の足元を照らした。この松明の火を見た貴族らは比叡山が燃えていると騒ぎだしたが、それが比叡山に最澄が帰って来た合図だということがわかったのは貴族だけでなく、それが洛中から発信されて日本中に広がるのは3日もかからなかった。空海もこの「比叡山燃える」を太宰府で3日後に知ったが、予定通りだと大笑いしていた。

※この小説の前半の部分と後半の一部に「小説西寺物語　19話」と重複している場面があります。これは小説の中で最澄が京の都に帰って来た時期と盆景和尚が京の都に盆栽を持ち込んだ時期が重なった(掲載時期)ために同じ表現になったものです。今後は重複しないように物語を進めていきます。伊奈利

小説盆栽物語　１５話　東寺、日本大観覧盆栽・植木市へ

　官営東寺南大門の目の前にある真言宗九常寺は盆景和尚の長安の盆景寺と規模は同じで空海ゆかりの寺らしく山門から本堂までの通路の両側には広い庭がある。この広い空間こそが民衆が集まる催事を開催できる条件になる。盆景和尚はこの庭に盆栽棚を作り長安から持参した47鉢の盆栽を展示していた。

　長安には盆栽を常時展示する盆栽寺と毎月15日に開催される青龍寺の植木市がある。この植木市に参加している造園業は約1000軒にもなるが、その内、盆栽を専門にしている造園業は約300店になる。この盆景寺も青龍寺も寺だから長安の貴族も一般民衆もまずは寺の本堂で手を合わせて拝み、賽銭を入れ、またはお布施を置くことを当たり前としていたが、この都の人々はまずは盆栽展示場に向かっていた。その帰りにも本堂で手を合わせる人は少なかった。また、街中でお坊さんを見かけると必ず立ち止まり必ず手を合わせ拝む文化がある。これは唐国の僧侶だけでなくチベットやモンゴルから修行に来ている僧侶まで同じで最澄や空海までも手を合わせられることには驚いていた。

　このことを九常寺の元住職の戒本に聞くと戒本は、
「この九常寺を建立した資金はこの九条村127世帯の農民が積み立てたもので建設工事や屋根ふきまで農民がしている。どこの宗派のお坊さんを住職にするかは村長や檀家総代が決めている。選ばれた住職の衣食住は村が責任を持って行ないます。つまり、この九常寺は九条村の村民だけの寺で他地域の人々にとっては他所の寺になりお参りしたり拝むことはない。これは村の鎮守の森の神社も同じになります」
「そうか～つまり、日本では村人が宗派を選ぶことになるならなぜ?、不人気な奈良仏教の末寺が多いのか?」
「それは比叡山仏教が出来るまでは奈良仏教しかなかったからです。寺には住職や僧侶が必要ですからやむを得なかったのです」
「そか、それで最澄さんも空海さんも奈良仏教から独立して農民や庶民から愛され尊敬される比叡山仏教を立ち上げられたのか?」
「そうです。私もやはり奈良仏教で修行していましたが比叡山仏教に改宗して仏教そのものが日本の民衆を救い幸せにするという根本思想を日本中に広めたいと思っています。盆景和尚が盆栽を日本中に広めたいという思いと同じです」

　この盆栽展示場の噂は宮殿の公卿や貴族まで広まり連日賑わっていた。京の都には平城京から造園業者が移住して愛宕山山麓の嵯峨の地で造園業者団地を作っていた。都が京に遷都されて10年を越えていたために公卿や貴族、それに寺院の造園も行き渡り次は盆栽が流行するかもという

期待で造園業者が連日盆景和尚から盆栽の基礎知識を習っていた。

　京都造園業組合の組合長で植吉造園の親方も朝廷の命令で第14次遣唐船で長安の造園業の八代目雅山に4年間弟子入りしていたという。その雅山の娘の玉林の婿が盆景和尚だと知ると、雅山は盆景和尚に、
「ほう～あの玉林はまだ子供だったが、盆栽いじりが好きで剪定鋏をおもちゃにして遊んでいた」
「その時には植吉さんは盆栽に興味はなかったのですか?」
「いや～あの当時は長岡京から京の都に遷都が内々に決まっていたので新しい宮殿の造園の構想ばかりが頭にあって盆栽のことは…ところで山門から入った東側の前庭は盆栽展示場になっているが、西側は何かにお使いですか?」
「いや、長安の盆景寺は雅山さんに唐国で一番の石庭を作庭していただきましたが、ここは予定がありません」
「その雅山さんの石庭の図面はありますか?」
「私が水墨画で描いたものは数枚ありますが?」
「わかりました…私が盆景和尚と玉林姫とのご結婚のお祝いにその水墨画の石庭を寄進します」

　５代目植吉も青龍寺の植木市を知っているのか、長安のような植木市の構想を練っていた。長安では政情が落ち着いたと同時に一般庶民が貴族や寺院のような庭に植木を植える作庭の流行があったことから長安の造園業は大きく発展した経緯があった。それが青龍寺の植木市だと分析していた。そして盆景和尚に、
「ここに展示している盆栽を見ようと我々植木業者以外にも一般庶民が多く見に来るが、これは京に都が遷都されて13年にもなって農民も庶民も豊かになった証拠だが、その一方で造園業や植木屋は作庭の注文が激減している。そこで目の前の東寺の境内で青龍寺のような植木市ができないかと５代目植吉は盆景和尚に相談をしていた。

　盆景和尚は、
「いや、私も空海さんも青龍寺の植木市を何回も訪れていたが、空海さんはいずれ東寺の境内を青龍寺のような植木市にしたいと言っていました」
「しかし、東寺な建設工事は中止で南大門も閉まったままです」
「それなら私が官営西寺東寺総造寺司の守敏僧都に相談をいたします」

　盆景和尚はもう数回会っている源光寺に向かっていた。西寺の南大門も閉まっているために盆景は羅城門から朱雀大路を北へ歩いていた。西寺の東門から入り西寺塔頭工事中の僧侶に守敏僧都はどこにいらっしゃるかと聞くとその僧侶は、
「大安寺筆頭塔頭の寺で西寺塔頭建造責任者の明心さまと会議されています」

　というのは西寺境内は広すぎて守敏僧都の自坊は西寺の北の端の七条大路の北門近くにあるので直接寺に行ってもまた同じ道を引き返すこともあったので境内で僧侶を見つけたら守敏僧都の居場所を聞いていた。やっと守敏僧都に会えた盆景は東寺の植木市の話しをすると守敏僧都は、
「それはいい話しで工事中止中の南大門の門を開けるかの許可を朝廷からもらう前に公卿や貴族が牛車で押し掛けるほどの盛大な華がある市にすれば朝廷も南大門の門を開けたことへの処分も出しにくい」
「し、しかし、それでは守敏僧都さまに多大なご迷惑が…」
「いやいや、私も空海の企画演出の思想がようやく分かってきた。するには中途半端ではなく京都造園組合の総力を挙げれば開かずの門も開くものだ」

　その第一回目の東寺植木市は唐国から盆栽が難破港に水揚げされ九常寺に着いた日が807年1月21日にちなみ毎月21日に開催されることに決定されていた。造園組合の組合長の植吉は組合員に各自が最大自慢できる植木を惜しみなく展示して見学に来る公卿や貴族から絶賛の声を挙げさせる植木市にしてほしいと激を飛ばしていた。

小説盆栽物語　１６話　第一回東寺盆栽展、大植木市大盛況

807年2月21日まだ建造中の官営東寺の境内で第一回の東寺盆栽展、大植木市が開催されていた。これに先立ち85農園加盟の京都造園植木組合では出入りしている公卿や貴族に植木市の招待状を送っていた。それによると出品している植木は日本中から集めた名木、名品ばかりでその数は3000点とある。さらにお買い上げの植木は後日無料で配達、指定の庭に植えるという。

これらの招待状は比叡山と敵対している奈良仏教系の貴族にも送られて早朝6時ごろから牛車が朱雀大路を埋め尽くし渋滞が起こっていた。この2月21日というのは梅、桃、早咲きの桜が同時に見られるという華やかさがあり、お公卿さんから貴族まで競うように買っていた。売約された植木には「正三位藤原公人さまご購入」「従四位菅原長友さまご購入」の木札が貼られて購買意欲をさらに高めていた。

正午からは一般参加者の入場も許されていたが、入場者は植木を見るというより公卿の〇〇さまが銀10枚の梅の木を買われた、貴族の〇〇さまが銀5枚の松を買われたなどのほうを楽しんでいた。盆景和尚が唐国から持って来た樹齢300年の岩茶の盆栽なども展示されていたが、これを買いたいという公卿や貴族もいたが、盆景和尚はこれは売り物ではないが、一ヶ月ぐらいなら貸すという契約も100件ほどありこの盆栽の手入れは出入りの造園業者が引き受けてくれた。

この植木市は午後三時ごろにはすべて販売、売約済となり京の都では盆栽と植木の大流行の引き金になったとこの植木市の開催を半ば強引に進めてくれた官営西寺東寺造寺司の守敏僧都の名前と人気は京の都の隅々まで行き渡っていた。これに怒ったのが平城天皇の第一夫人(天皇の愛妾だが既婚)の薬子で平城天皇の命令で建造中止中の東寺の境内を開放して植木市を開かすのは天皇に逆らう国賊である。そもそも守敏僧都は官営西寺東寺造寺司を解任された上に官位も剥奪された身分でなんら東寺とはもはや縁もゆかりもない坊主が南大門の門を開けたと宮殿で騒いでいたが、取り巻きの貴族そのものが東寺の植木市で植木を買っていたので薬子の怒りは皇太子の源神野に向けられていた。

薬子は宮殿の長い廊下を走って皇太子の屋敷に駆け込んだが、皇太子は庭にいて、薬子に、「薬子殿、いいところに来ましたな～こないだの東寺の植木市で買った梅の木が届きましてたったいまさきに植わったのにもうウグイスが遊びに来て「ホゥ～ホケキョ～」と鳴いてくれています。いや～癒やされますな～薬子殿」
この皇太子の言葉でなにもいわずに薬子は腹は立つが矛を収めていたが、このことで毎月21日の東寺植木市が事実上認められたことになり現在も弘法市として1200年も続いている。

3月21日には第二回目の「東寺盆栽展、大植木市」が開催されていた。今回からは夜明けから日没まで一般市民も参加できて販売の植木も公卿や貴族しか買えない高価なものは参考出品程度でほとんどは庶民にも手が届く20文～100文(米15キロ40文～50文)ぐらいのを取り揃えていた。中には鉢は別売の苗木のみで5文均一もあり、この安さから植木の流行は一気に広がり始めていた。そうなると植木鉢が必要になり瓦を焼く窯元まで植木鉢を焼いて植木市に並べていたので毎月21日は京の都唯一のお祭り広場になっていた。

この東山の窯元が陶器を焼くのには大量の薪がいるが、この薪は鴨川左岸から東山の麓までの広大な雑木林の自然に育った松なとを伐採して薪としていたが、その雑木林もすべて刈られて広大(現在の東山区全域、京大～祇園地区～国立博物館～三十三間堂～第一日赤)な更地になっていた。その薪が刈り取られた後には小枝や枯れ木が残るが、それも農民たちがかまどや風呂のたきぎを拾いそこが野鳥の楽園になり鳥が植物の種を持ち込んでいた。それが日が当たる土地になりさらなる雑木や花の種が育ち芽を出し苗木になっていた。

その苗木の中の金(植木)になりそうな苗木を盆景和尚は西寺の北の村の西七条村と南の村の九条村の農民に現地で教えていた。これは唐国の長安でも造園や盆栽が民衆に大流行したために植木が足らなくなり農民らはこぞって山の麓から金になりそうな苗木を見つけ持ち帰り造園業に売ったりして生計を立てていたことを思い出していたからた。

さらに唐国ではこの植木になりそうな苗木の取り過ぎでもはや山の麓には苗木はなくなり、300年前にある少年が険しい山に登り見つけたのが風雨に数十年も耐えた幹ばかり太くて背が低い松を持ち帰ったのが「盆栽」の始まりだったことを盆景和尚が盆栽の修行の師匠である八代目雅山から聞いていた。この300年前に山に登り盆栽を見つけた少年とはこの雅山の先祖の初代雅山になる。

と、こんな話を農民に話をしながら盆景和尚は村民に苗木の種類、見分け方や掘り出し方を現地で教えていた。中には珍しい唐木の白檀や黒檀の苗木もあり、さらにこの苗木を盆栽にする方法まで教えて農民が豊かになることを願っていたので盆景和尚も村民から慕われていた。また盆景和尚は農民が苗木を売りやすくするために九常寺に農民が採取し育て手入れした苗木を常時展示して植木業者が苗木を仕入れに来る苗木市場を開設していた。もちろんこの苗木は東寺の植木市でも売られていた。これもあれも長安の300年前の姿になるが、まだまだ仏教や僧侶への民衆からの信頼は遠いものだった。

九条村や西七条村の農家の日が良く当たる庭では鴨川左岸から採取した苗木をさらに大きく育てたり、種を採取していたりしている。その種から盆栽を育てまた珍しい花なども栽培して植木市で売り副収入を得てその一部を盆景が住職の九常寺にお布施として収めていたので寺の経営はすこぶる楽になっていた。盆景和尚は唐国で修行中の空海に巡り会い2年間毎夜般若湯を飲む仲

間だったが、その般若湯を飲みながらも空海が目指す真言宗の根本は「民衆を救済して幸せにする」を耳にタコが出来るほど聞いていたが、さて、私はたかがこんなことで「民衆を救済して幸せにする」ことができるのか、また他にすることはないのかを聞くために空海の師匠の最澄が修行している比叡山へ出発していた。

小説盆栽物語　１７話　盆景日本初の茶の種を撒く、坂本、信楽、朝宮茶

盆景和尚の日本での仕事は盆栽を普及させることの他には茶の木の栽培と茶を飲むという文化の伝承もあった。これまで遣隋使から遣唐使まで数回に渡って茶の苗木や種を持ち帰り栽培を試されたが、どれも成功はしなかった。盆景和尚は中国での茶の発祥の地でもある福建省の岩茶研究所でも茶の修行をしていた。この岩茶を険しい山に登り見つけ持ち帰ったのも盆景が盆栽の修行をしていた八代目雅山の初代の雅山少年でもあった。その雅山少年が見つけた300年前(現在からすれば1200年)の岩茶の原木は今でも福建省の岩茶研究所に3本あり、その雅山少年が作った盆栽2鉢の内一鉢を日本に持ってきてそれは九常寺で常時展示されている。

この岩茶は元々烏龍茶の種類だったが、種や接ぎ木、挿し木から改良されて紅茶や緑茶になった。世界の茶の先祖はすべてこの雅山が見つけた岩茶になる。盆景和尚が日本に持ってきた茶は空海や最澄が好んで飲んだ緑茶が日本人には口が合うと緑茶の種を選んでいた。岩茶研究所で教わったことだが、この緑茶は椿が育つ土壌が好きでそれも根が真下に延びるので椿が育つ表面近くの土壌が地中1メートル以上ある土地が良いと聞いていた。

その話を元九常寺の住職の戒本に話をしていると、戒本は、
「私は比叡山で10年修行してきたが、最初に赴任した寺が比叡山の里坊坂本の恵光院だったが、この坂本の地は比叡山の麓から琵琶湖まで急な坂で里坊50ヶ寺院を建てるには段々畑のように琵琶湖側に約20～30段の石積み(穴太積み)が必要になります。そこに土を入れて平にします。そこに寺を建てて琵琶湖側に庭を作りますが、その庭には椿の種が土に混じりこんでいたのか、アチコチに椿の新芽がでますし椿も大きく早く成長します。その土は日吉大社の北側の山のものですが、その山には椿の大木が多く自生しています」
「ほう、椿の大木なら地中深く根を張るから茶の土壌に適しているかもわからない」

盆景和尚は戒本から恵光院の住職への紹介状を書いてもらい坂本に向かっていた。京から坂本までは約5里だが、国土が日本の10倍もある唐国で育った盆景和尚には5里ぐらいは寺子屋に行く程度の距離でおにぎりを3個持って出発した。三条大路から東山を越えて近江との国境の逢坂峠からは眼下に琵琶湖が見えた。元大津京があった大津港から琵琶湖の西側を北へ歩けば比叡山延暦寺の山門と里坊の町、石積みの町坂本に着く。

湖岸の琵琶湖から比叡山延暦寺根本中堂までは急坂で約一里だが、先に戒本が修行していた恵光院の住職を訪ねた。恵光院の庭からは琵琶湖が一望できる。その庭にはたしかに椿の木が多い、住職は、
「この土を取った山はもう平地になり今は日吉大社の敷地になっています」

「そうですか、それなら椿が自生している山はありませんか?」
「いや～それはもう坂本にはないが、この庭でその茶の木を育てて下さい。幸いこの寺には修行僧が3名いますからその僧侶に世話をさせます」

盆景和尚と3人の僧侶で琵琶湖の湖面からの日の反射がよく当たる石積み際を耕して盆景が持って来た約100粒の種の内50粒を撒いていた。この茶の木は新芽から4年～6年しないと茶の収穫はできないので盆景和尚の日本への留学中には茶摘みはできないのでこの茶の栽培のすべてを住職と3人の僧侶に託していた。

この住職の恵光は近江の国甲賀信楽朝宮村の出身でこの朝宮村にも椿の大木の岩谷山があることを盆景和尚に教えていた。その場所は平城京の離宮があった紫香楽宮に近くその当時の公卿が椿が好きで植えたものだが、廃宮になりそのまま椿は大木になったという。この山は天台宗朝宮寺の裏山になるのでここにも残りの種を撒こうと決まっていた。

その夜は恵光院に泊まり盆景のおごりで3人の僧侶とともに般若湯で宴会をしていた。明くる日には信楽に行く予定だが、坂本から信楽までは約12里ほどあるが、道も山また峠の連続で到底唐国の盆景では行けないと2人の僧侶が道案内をすることになった。信楽は山里だが、紫香楽宮跡や甲賀寺もあり農家の数も多くて朝宮寺の屋根は瓦葺の立派な寺だった。

盆景のまだあやふやな日本語に代わり恵光院の僧侶が朝宮寺の住職に茶の栽培の説明をしたので住職の香山はすぐに納得して寺の裏山の日当たりが良く水はけが良い南側斜面を茶畑に貸してくれた。そしてこの茶の唐国での由来を説明してから、香山に、
「私はこの茶の栽培には参加できないが、もし4～5年先に茶葉が収穫できたら真っ先に比叡山の最澄と空海に報告してほしい、その先は比叡山から天皇に献上する日本国最初の茶になります。そしてこの茶は「朝宮茶」と命名してほしい」といいながら盆景は香山に銀一枚を手渡していた。

★17話のあとがき=住職の香山は朝宮村の農民に朝廷に献上する「朝宮茶」を栽培することは名誉なことでこの茶を村民一同で育てようと激を飛ばしていた。盆景和尚が茶木の育て方と茶葉の収穫方法や茶葉の蒸し方、乾燥方法まで描いた水墨画に書面は100枚以上に及びこの書面は朝宮寺が厳重に保管して村外持ち出し禁止となった。

やがて5年の月日の後に朝宮村と坂本の恵光寺の茶は育ち村民の手で加工されたが、失敗の連続で盆景和尚に聞こうと思っても盆景は809年の遣唐船で唐国に帰国していた。813年の八十八夜に収穫した茶葉でやっと成功した日本初の緑茶は比叡山の最澄と空海に報告され嵯峨天皇に献上された。これを歴史上は最澄と空海が唐国から持ち帰った茶とされているが、盆景和尚の名前は日本史からなぜか?消えていた。

この朝宮茶の種や苗木は高く売れたが、それが朝宮村の隣村の宇治田原、宇治に広がり、やがて全国に広がったが、この茶を唐国から持ち帰った最澄、空海には農民が感謝して天台宗と真言宗と茶の栽培が爆発的に全国に増えたのは盆景のおかげだと空海は唐国の盆景和尚に感謝の手紙を送っていたが、そのころの盆景和尚は唐国一で首都長安の西明寺の貫主大僧正宗景に出世していた。